

大正十二年七月七日第三種郵便物認可
昭和四年八月十五日印刷納本

昭和四年八月十五日發行 (每月一日發行)

山とスキー

第六十四號

第九十四號



札幌 山とスキーの會 發行

◇すまりをて得を讀愛御の下殿宮父秩りよ號刊創は誌本◇

次目號大倍號四十九第



記事

雪崩に就いて

「屋上登攀者」その他

入浴及びマツサージに就いて

其の頃

大雪からトムラウシへ

路面スケッチ及び地圖の作り方

豫備練習の身体に及ぼす影響

スキーへの憧れ

スキー競技會とそのコースに就いて

山とスキー第八年 總目錄

寫眞版

マツターホルン

カールセンの飛躍振り

オベレンガーデイン

宇都宮 高譯

加納 生

奥井由雄 譯

廣田 生

武野穀次郎

森田昇 譯

中村 生

うゑかつ 生

山田勝巳

〔一〕

〔八〕

〔四〕

〔七〕

〔三〕

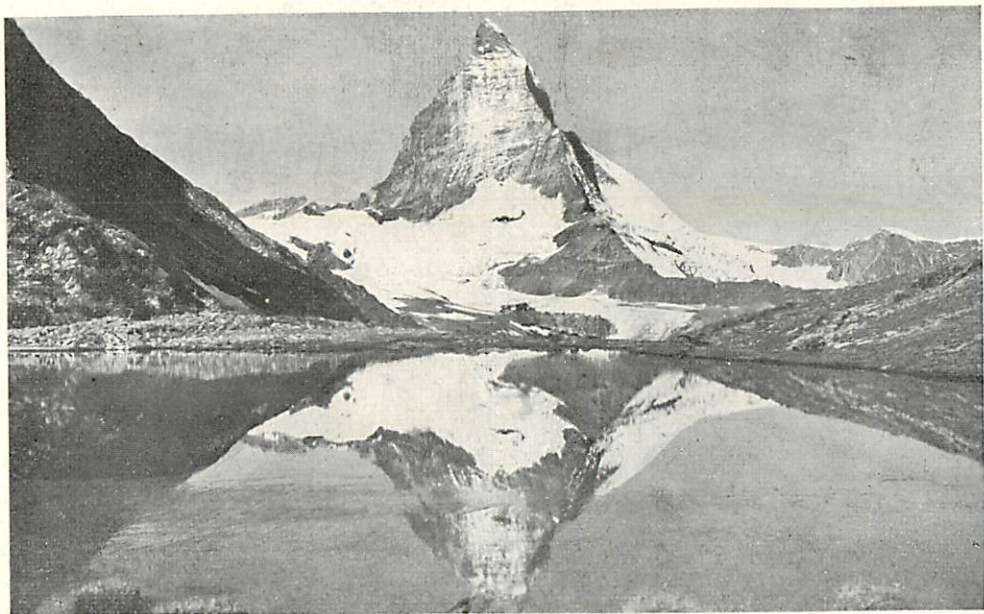
〔元〕

〔盟〕

〔番〕

〔突〕

昭和四年八月發行



Mt. Matterhorn

雪崩に就いて

エミール・シグモンデイ 共著
ウイルヘルム・パウルケ

宇都宮 高 譯

崩れは色々様々の事柄より從屬的に起る。例へば土地の状態、摩擦の如何、稀には積雪の厚さ、雪の状態よりして起る若し雪の重さとそれに生ずる壓迫が土地の摩擦抵抗に打ち勝つことが出来れば雪は滑動流動を起す。稀に若し外部より來る防害が支柱關係にある状態に對して衝害を與へたり、或は單に詰らぬ動機が統制状態にある被蓋雪に突然作用するとその運動を起す。實際に重大な事は土地の關係である。即ち雪崩れに重大なる關係ある雪の堆積が出来ない整正された岩石は僅かにそれが起り、枝條、樹木ことに林は崩れに對抗する。それらは雪量壓にも充分に抵抗し得る。

屋根形をなした岩石地方は谷の積雪部の上から滑り出し、スレート、粘土層の少し風化された岩石は強い岩石より好都合に崩れが起る。

強い摩擦に依り僅かの力の積雪が軽く滑動を來たし人に危害を與へることもある。然し多くのアルプスの谷は高い所から漸次に氷河上に持ち運ぶ。而してそのために其の場に存在する岩石の側面はなめらかになり、その結果自由な發達におちいる。其れ故に林の拘束なき高山地方の谷は大なる注意を要する。ことに僅かの土を有する變化ある谷は非常な危険あることを知る。

芝地の險阻な傾斜面は雪重量のため好都合な滑動面となり、而してその傾斜面は最も初めに崩れる地方であり、その結果長い芝地のシアツベは藁葺屋根の様になる。

崩れが切り取る雪の一定の傾斜角は土臺の關係や雪力雪量の如何に依つて説明出来ないが、二十五度以上の傾面は危險ある事がわかる。若し平たい石や、芝、硬雪では僅かの傾面でも滑り出し、此の限界は自由に變化される。然し極限度は一般の支點ある所で二十四度、硬い所では二十一度で崩れが初まる。何れにせよ險阻な傾面は常に注意を要する。

山腹の階段面と平かな面は傾面に沿ふて雪壓を不均等にし、抵抗場所や支點を作り、崩れに對抗する。而して板狀雪の下の路面の成行を知得し得べき間は比較的に外部も確められるだらうが、その時若し傾面を識別し、支柱がなく雪の上半がこわれていつたら危險が存在する（この危險は普通狭い）險阻な滑り易い傾斜のある所、ことに高山地方では、短い土地の凹凸、大きな石塊、路斷面等は外部的に認識し得る。

崩れの危險に就いての批評は雪表面の性質で豫想し得る。即ち我々は其の場所の硬い土臺の傾斜關係や、色々の積雪の上下の有様を縱斷面に依りその面の力を豫想し得。

雪が加へる壓力に就いては多くの人はその確かな智識を知らない。これに對して Inenieur の氏は屋根の雪量に付き實驗せり。その結果に依ると新雪の重さは一立方メートルにつき六十疋より八十疋。少し落ちついたものは一立方メートルにつき二百以上三百疋（氷は一立方メートルが九百疋）溶結した雪は五百乃至六百疋、濕氣に富んだ雪は一立方メートル、水平な土臺では重力一立方メートルにつき三百六十疋より四百八十疋。故にそれに應じて各々の壓力は滑動面に沿ふて起り、膨脹し粉細し、人の上に起り來るのを理解するだらう。又單に僅かの積雪でも險阻な傾面にては滑り出し我々の上に突進することを豫想し得。

雪重の差異は既に書いたとおりであるが又天氣豫報に依り直接に計られる。（中略）

雪と一般的狀態の關係より崩れの性質に二種の特性即ち完全雪崩をやるものと細末雪崩れをやる性質のものがある。こ

れは自然的雪の關係即ち雪の力に依り云ひ表はされる。以下その特性に應じて崩れの様子を述べるに、

1 新雪崩れ

a 乾性崩れ……細末崩れ（表面が部分的に崩れる）

b 濕性崩れ……完全崩れ

2 舊雪崩れ

a 濕性殘雪崩れ

1 新雪崩れ a 乾性崩れ

(A) 雪の性質

(一) 乾いた粉末砂狀 (二) 一立方糶米中に〇、〇六—〇、〇一の水分 (三) 積雪中の僅かの内部摩擦 (四) 各粒が互に常に動き
る得 (五) 雪は固まらず緩慢で存在す

(B) 條 件

(一) 寒氣中の降雪 (二) 降雪後激寒の來とその繼續

(C) 現象道程

崩れは單に短く、險阻な所は細末となる。崩れの初めの状態は單に短い。その墜落長ければ雪は渦卷激しい崩壞に依り空中に散飛し、旋廻して谷に細雪狀となり落ちる。崩れが急いで崩壞を惹起すると特に強い空中壓がおこり、激しい活動を以て落下堆積、林やゆるやかな傾斜地に積る。

乾性新雪崩れは主に冬の崩れであるが、然し自然的に高山地方の寒い氣候では何時も起る。粉末砂狀新雪の降積があつた後繼續的に寒さあり、ことに曇れる天氣であるとその乾性崩れの危険が一般的に永く續く。

風は峰の表面の有様を變じ、力強い廻旋に依り雪をもて遊ぶ。その活動は乾性崩れの構成に有効なものとなる。風に依り支配される雪の沈澱量は大きな量のものとなる。稀に靜かな天氣に降雪し、その後風が吹き粒子を峰や山滑の風のあたらない影に運び堆積する。風のあたる面は充分に吹き散し、その結果ピツケルやアイゼンを以て路をたどるが、反對の雪扉側即ち風の影地は降雪のないにもかゝらず非常な雪量を堆積し崩れの危険を存す。

斯様に色々の谷、峰の變化は必然的結果で、地方的にレーザイテン（風の影地）に乾性雪が堆積し崩れがある。

若し軽く外部を包む雪や不確實な天氣に依り谷の状態を知る事が出来ないなら危険性は多分に存在し、時たま人は突然に滑り出すのはかゝる状態にある故なり。まづ險阻な側を注意するより風のないレーザイテンを注意することが必要である。快晴で長い風吹きの中に乾性雪を峰や坂の上より吹き拂ふ故に、斯様な日に山の靜かなレーザイテンを歩行することは注意を要する。

特別な状態で相互に出來上がったものに板状雪として名稱を附すものもある。この名は私の感じより附したものでなり。

板状雪は楕状雪の根底状態の様子如何に従つたものである。ことに雪の性質上種々のものもある。これは密な細粒の組織よりなる層をした雪と區別し、外形が石灰様白色、鈍な感じがある。表面は滑らかに平たく、時として沈形状にして足は決して踏み込まない。

b 濕性雪崩れ——完全崩れ

性質 (一) 濕つほく重い (二) 球状を呈し易く早く落ち付く

條件 (一) 高温中の降雪 (二) 雨後の降雪 (三) 暖かい大氣 (四) 降雪後の日時

若し雪量が抵抗状態から脱し非常な急速な破壊となると表層は細片し細末崩れとして谷に落ちる。この場合その下層の雪は塊状となり谷に完全崩れとして落ち、土臺と淵に沿ふ溪流は（増加した摩擦地方では）ゆるやかに表面に沿ひ、崩れ

の中央に随ふ。上の部分は麓の上の方に粉細し、濕性雪は乾性質になつた雪と一緒にして止まる。濕性崩れは降雪後暖氣になると起り、新雪で覆たる谷が強い日時のために生ずる崩れである。これは冬に起るが比較的稀れである。ことに春に起り易く、夏の降雪後にはその特性を充分に表はすことあり。崩壊地や曲線地のために稀に粉碎し、或はその結果停止の状態にあるこの崩れは強い共壓の濕性雪となり、粒子結合し、密閉状態の体積となり、ちよつと石膏中に水が入り、固くなり解脫出来ない様になる。

2 舊雪崩れ——濕性残雪崩れ

これを昔の人は完全崩れと一緒にして居つた。

性質 (一)水分多く重く (二)ザラメ状の古い雪

破壊條件 (一)舊雪 (二)暖氣 (三)烈風、雨 (四)強日射

この崩れは春に多くあり、溪谷の残雪の相互運動に初まり、水の塗油性に依り形作らる。残雪塊の抱水は土に吸収され土地の温度に依り雪を溶かし、最下部の残雪層は鹽分パン状になり土は平滑になる。雪は層々溶水を流れ出し中空にする而して後積即ち中空共に破壊し、自の重さに依りその土臺上を完全に滑り出す。雪はその滑動廻旋のため球状となる。水分の多い残雪崩れは巾広い谷に沿ふて破碎運動をする。而して人は時々雷鳴と共に崩れが前後して來るのを見る。特にこの崩れの状態は溪谷の破碎に沿ふて枝狀漏斗狀の地方を占め行はれる。これは規則的に春に靜かな所に起り、而して人々はこの崩れの状態よりして隧道工事や他の施設に従ふ様に防備する。

残雪は多く一般的適應性の *Johal* や *Bachnise* の名あり。土や砂や石や木枝條等と一緒に大塊となり谷に沿ふて落ち付くため粉碎作用を起し來る事あり。即ち小川や川を堰め、晩夏まで谷間の影に多く積み残り、そのため雪橋を作り小川が道を喰ひ開いて居る。登山者に對して此の状態は危険なものであり、而して此處のその様子は最も地方的天候の關係に依

りて批判される。注意——積んだ所や溝に踏み入らないこと、或は獨りだけ急速に筋かひに入ること。

谷川のない雪橋は非常な注意を以て、ピッケルで深さを計り踏み入る事である。斯様な橋を渡るは非常な不運があると云はれ、そのため溺死する事あり。

固い残雪や拘束なき雪の上に雨後降雪し、或は續いた暖かい天氣のため濕性の雪が降り續き、その後寒氣のため氷結すれば滑動危険は減ぜられ、積雪力は輕微なものとなる。然し牡丹雪の降りし後高温度續き、他の新雪降りし後も暖い天氣が續くと雪は重くなり、終に積雪下部は滑り出す。これは春や夏日光に依り午前十時より午後四時頃までの間に多く起る。寒い天氣に纖維狀の或は小さい結晶性の乾燥した雪が土地（草地）上、乾燥した岩石上又氷や土臺の硬い雪の上に降ると、摩擦抵抗は非常に減ぜられ、切れ離されたる重みある雪は樂に滑べり出す。又續く寒い天氣のために、尙粉雪降の後にも乾性崩れの危険が續くことあり。その雪は冬の經過中種々の連續的降雪のため土臺の表面の形態に影響し、それと共に滑動状態にも非常に強く影響する。

溝は時間の經過と共に詰められ、谷間に沿ふた澤の破碎は平均され、即ち道路の截切りを完全に消滅する。而して一様な傾斜面にし、峯より又脊より風に依り雪が持ち運ばれ、險阻に傾ける谷は雪を下の方に送りゆるやかな所に堆積する。小崩れは險阻な階段を有する溝に最初始まるが、それは多くは溝の下まで流れて行かない。此れに反して上階段の足もとには山の方に尖頭形をなせる壓せられた圓錐形の雪を堆積し、崩壊した所の凹凸は一様になり、其處であとに出來た道は平坦となる。此の谷は長い降雪の後即ち冬の末より夏の末までは初冬に於けるより特別な崩れの危険がある。

急に降り出し、それが長く續くと、種々に膨脹した積雪が上下に層を作り、危険率が増して來る。又暖かい大氣の溫度や束の間の雨がクラスト狀の雪を殘雪と共に溶け合はしたり、日光の直射のため或は烈風のため危険な状態におちいることがある。

崩れの危険は總ての影の方、又單に地方的に限られた日射面や、新雪降の後風壓された傾面の範圍に存在する。屢々ク

ラストの下に砂糖様な乾燥した粒雪の在存の結果中空となり横はり、その爲め自重に依り、完全な層の滑動が惹起されることがある。如何に強く凍結した単一の層でも、如何に深くまで硬結したラストでも自然的に進捗する力よりして、又不意に出會ふ天候の影響に作用される。如何なる場合にせよ冬の経過中には非常に變化ある積雪が互に層をなしてゐる。それは結氷狀でなく緩く積り、表面の妨害に依り崩れが起り出す様な色々な状態を順次に了解し得。然し如何にしても壓力のもとに又斯様な層から溶出する水は早晚結氷するを見る。緩慢な積雪を存するラスト狀の變化激しければ雪層界に沿ふて軽く滑り出す。それに付き多少ピツケルやストックを持つて深さを測り説明し得る。而して充分に正確に雪層の結合状態を調査することは登山家並にスキー家の本分である。彼等は總て表面を視るのみでなく層の關係を縦斷的に考へ、天候が降雪間如何に作用したかを確めなければならぬ。(續く)



『屋上登攀者』その他

加納生

六角机上、原稿堆裡に『こんなものができました』といつて示された詩稿『屋上登攀者』は私にとつてまるで炎天下のバラストの中に一個のサファイヤを見出したやうな、驚きと、悦びと、清純さとであつた。その（巴里に在りし日の私の生活の横顔）といふ脇見出しも決してキザな感じを與へないほどにこの一篇の詩は都會生活者の熾烈な登高慾をよく表現して、あたかもその中に歌はれてゐるノートルダムの *Aiguille* のごとく鋭く、強く迫つてくる作であることに六人の子の父たる著者の山岳への精進の、ある意味においてものすごくさへ思はれる心境がもられてゐる點から、山仲間にならぬ刺戟を與へずにはおかない。

この一見奇矯な詩の標題を、標題とした藤木九三氏の新

著は『岳から降りて來た男』二人の登攀者』と合せて三篇の詩と『ザイル・テクニクと氷斧の變遷』『單獨登攀考想』『ガイドレス登攀の考察』の三篇の研究論文と、ほかに十餘の隨筆、感想等を集成したもので、三つの研究論文のごときは内外における著者の幾多の體驗と、古今にわたる大山岳家の著書を涉獵、検討したうへに生れ出た勞作であるだけに、多大の啓示を含むでをり、殊に『單獨登攀考想』の一篇はこの種のものには罕に見る情熱のこもつたものであり、伊藤、加藤兩君の山行を論じた點など、ゲオルグ・ウインクラー禮讚者の見逃しがたきところであらう。

また『座席』や『岩場の幻想』や『好日山莊』などは關西の山岳人にとつては如何に多くの回想を起させるものであるかはいふまでもない。更に（マッターホルンで拾つた

頗る古風な一箇の靴鉾についての私の創作的聯想……)であるところの『ある日のウキムバー』に到つては、恐らく我が國の山岳界、氏をおいて外にこの作をなし得るものはあるまいと思はれる。

装釘並びに挿入の版畫等すべて中村勝郎氏の作は著者その人及び各篇の内容にびつたりとしてゐて間然するところがない。印刷、用紙、製本の水ももらさぬ手ぎわにおいて出版者たる中原繁之助氏の苦心の跡が素人目にもうかがはれる。兩氏ともR・C・Cの同人で藤木氏とは古い山仲間であり、この三氏の氣もちがしつくりと合つて出来上つたのであるから、内容、外觀とも書物としてこれほど申分のなものとは尠いであらう。ある人はこれを横有恒氏の『山行』以後の名著であると評した。私はむしろこの『屋上登攀者』一卷をもつて、小島烏水氏の『日本アルプス』四巻に匹敵する名作であり、豪華版であるといひたい。『日本アルプス』は今日では、クラシツクの部類に屬すべきものであるが、この新著は我が國山岳界の最近の先驅者の傾向を表してゐる點において、いやしくも山を想ひ、登高を念とするものゝ、一本を藏せずにはすまされないものである。

今夏、山に關する書物はなほ他に二三出版されたが、この書のごとく藝術的で、この書のごとく著者の個性と環境の出てるものはない。大阪市南區鑛谷仲之町の黒百合社出版、定價三圓八十錢もこれを觀、これを手にした上は決して高いものではない。



事實に依據せるアルプス高峯劇と註された映畫『マッターホルンの征服』全九卷の完成が傳へられたとき、人々はどんな期待を抱いたことであらうか。私はその脚色がアーノルド・フランクであり、『フックス・ヤード』以來、おなじみのシュナイダーも出演してゐるといふことをきいてじつとしてゐられなかつたのであるが、それが輸入せられて、大阪での試寫を餘儀ない事情のために見落したためまた二ヶ月も悶々の情を堪へなければならなかつた。

が、たうとう、それは七月二日、大阪の朝日館で『マッターホルンの夕』として公開せられた。『マッターホルンの夕』は朝日の藤木九三氏の講演『マッターホルン登攀の史實』とこの映畫とから成り立つもので、恐らくこの映畫の鑑賞が、かゝる氣持よさと完全さにおいて行はれたの

は、他にはあるまいと思はれる。折柄のむしあつさをも忘れて一千七百の人々はこの尖峯の映像と、それからまる人類の闘争史に酔はされたのであつた。『ある日のウヰムバー』の作者たる藤木氏が、マッターホルンをめぐる史實のかすかず、ウヰムバーについての微に入り、細をうがつた話は、今迄に幾度か、読みもし聞きもした有名な物語りでありながら、單に映畫鑑賞の豫備知識としてではなく、多大の教示を含むでゐた。

しかし忌憚なくいへば講演があまりに立派であり、史實の真相が詳細に述べられたために『事實に依據せるアルプス高峯劇』の斷はりにもかゝはらず、この映畫の脚色に少からぬ不合理があることが暴露されてしまつたことである。ことに映畫のすぢみちにおいてアントン・カール（聖山でおなじみのトレンカーが扮してゐる）とその妻をめぐる痴情關係が前半をリードしてゐる點に非常な不快を感じたのは私ばかりではあるまい。由來山は女人禁制である。今の世は男女對等とはいひながら、山には色氣のない方がよい。よし女性の存在が必要であつても『フックス・ヤード』程度の無邪氣さにおいてのみ吾々はこれを容認する。

このやうな俗世間に掃いてすてるほどある三角關係を、何もわざわざ氷と岩の殿堂にまで、運び上げるには當らないことだ。それにからまつてカールが嫉妬のあまり、ウヰムバー謀殺の下心を抱いて二人で登攀して行くとき、懸垂中のザイルを切らうか切るまいかと悩むあたり『聖山』でヴィゴとその友において見たと同様の技巧で、またかと思ふばかりである。

フランクは最近『ベルグシュタイガー』といふ新作をものしたといふ。それにもやはり父の遺志をついで初登攀に精進する青年に、一個の女性を配してゐる模様であるが、果して成功してゐるかどうか。

ロック・クライミングについての種々の場面は今迄のどのアルプス映畫よりもよく表はれてはゐるが『フックス・ヤード』がスキーの技術的方面で多大の驚異を與へたに比すればさまでとは思はれない。墜落の場面に到つては映畫的にするぶん思ひきつた畫を見せてはゐるが、あのカタストローフをやまとする映畫としては、何だか物足りない氣がせぬでもない。私が最初この映畫の作られたことを聞いたときに思つたのは、ウヰムバー達が見たといふあの幻

影を如何に取扱ふてゐるかといふことであつたが、これも今少し何とか効果的に出せなかつたものかと考へられる。——かういつてくると映畫『マッターホルンの征服』はまつたくつまらないものゝやうに見えるが、しかし全然とるにたらぬものであるといふことはできない。いままでたゞ靜畫によつてのみ仰いでゐたモン・セルヴァンの英姿が自由奔放な撮影技術によつて展開せられる點、その岩、その氷に光畫的秀逸の存することなど必ずしもフランクの名を辱めない。

なほパウエル・グレッツツの扮する佻儻の山案内者マイネツトは、藤木氏によればその性格も行動も大分事實とは違つてゐるとのことであるが、私はこの畫面に表はれた一個の人物としてのマイネツトを見ながら、何とはなしに板倉君を思ひだした。あの容貌といひ、物こしといひ、どこかに往年の「ワンデー」の、おどけた一面を想はせるものがあつたのは偶然とはいへ私には奇妙である。

この映畫と『聖山』とを比較して私は、却つて極端に技巧を用ひた點で後者を撰ぶ。また『スキーの驚異』と比較しても技術上の啓蒙的效果において後者をとる。で、『マ

ッターホルンの征服』は結局アルプス登攀史上の一つの顯著なる出来事、偉大な山岳家ウヰムバーを取扱つてゐるといふことにおいてのみ注目さるべき映畫であるといはねばならぬ。



冬季登山から岩石登攀へ、岩石登攀から單獨登攀へと山岳界の先驅者達は努力の道を、いよいよ深く切り進んで行く。またその後随ふ大衆登山家は年とともにその數をまして殆んど停止するところを知らない有様である。そして日本山岳會は、このいづれをも統制する力なしに遙か背後に残されてしまつてゐる。それでいふんだらうか。

正當なアクティヴィテイをもつた組織が生れ出なければならぬ筈だとは誰しも考へてゐた。だがそれは容易な仕事ではない。

ところが今夏、東西相期せずして大學専門學校の山岳部聯盟組織の話が出で、關西學生山岳聯盟は去る六月二十三日京都帝大樂友會館で發會式を挙げ、京大旅行部以下十四校の参加をもつて慎重な、合理的な第一歩を踏み出した。悦ばしき誕生である。祝すべきエポックメイキングであ

る。

過去のわが山岳界はたしかに社會人によつてリードされてきた。しかし今日のそれは數において、力において、熱意において學生山岳家の手に殆んど全く逆であり、所謂運動この傾向は他のスポーツと比べて全く逆であり、所謂運動普及とか何とかいふ方面から見たら感心すべきことではないかも知れぬが、事實さうなつたことに致し方はない。たゞいつまでも學生山岳家を中心をなして行くかどうかは解らない。おそらく今度のやうに組織され發達して行く學校山岳部を搖籃として、或はこのアルピニズムから飛躍して偉大なる Exploration と Explorer とが輩出するに至るかも知れない。いや確にそこにまで到達するであらうことを私は信ずる。

關西の聯盟に關する限り、その組織が甚だ堅實になされたこと、功を樹つるに急ならざること等、どこまでも『山』を離れざる氣分のみなきつてゐることは當然なことゝはいへ賞むべきであらう。傳へらるゝところによれば東京方面の聯盟が斯界の先輩をプレジデントに仰がうといふのに對して關西聯盟が純然たる學生自治の組織をとつたことは注

目に値する。私は實際そのいづれが是なるかについては判断に迷ふものであるが、要は聯盟の將來の活動方針如何によることゝ思はれる。

關西學生山岳聯盟はさしあたり上高地におけるアニユアル・キャンプとオフイシアルリポートとを具備の事業として發表してゐるが、目的とするところはいふまでもなく各學校山岳部の融和、聯絡である。従つてまたその第一の仕事は聯盟に向つて働きかけねばなるまい。各校間の接觸に關する問題がある。それから加盟各校の一々については先驅者たる部の幹事と大衆登山家たる部員との對聯盟感情の相違をどんな風にするかの問題である。この點については從來學校山岳部の幹事たる人々が感じた悩みが加重せられることゝもなるのであるが、しかしもしそれが氣ももちよく展開されるならば、愉快もまた二倍せられるであらう。

差し當り聯盟委員の頭をなやませねばならぬのは資金の問題であらう。加盟校から會費を徴收せぬことにした事情については止を得ぬことゝはいへ多少の危懼なきを得ないこれを映畫の公開や出版の収益にまつことは洵に適當なことではあるが、それらの事業に關與する勞力及び時間的奉

仕について地の利や人数などの點に關して、圓滿なる協調
がとけられて行くやう望んでやまない。

他種のスポーツの聯盟とはその目的、趣旨において全然
類を異にするものではあるが、しかしその組織なり、事業
の遂行上には、これらの團體が經過した種々の困難を參考



する必要はあらう。たゞ山岳的精神の忘れられない限り、
この新興の聯盟は必ずや將來、わが山岳界の有力な一統制
力として働くべきことは疑をいれない。
徐々に然し力強い基礎の確立のために、ベルグハイル！
ベルグハイル！をとなへたい。

入浴及びマツサージに就いて

デファン及びハンネス・シュナイダー共著

「デル・モデルネ・シー・シュポルト」より

奥井由雄譯

入浴

苦しむ様になる。

あらゆる文明人にとつて自己の身體を保護し清潔に保たねばならぬ事は明らかな事である。水は空氣、光、太陽熱等と全く同様に人生にとつて絶対に缺く可からざるものである。若し以上の事が各文明人に適用されるならばトレーニングに従ふスキー家には二倍に重要な事である。

衆知の如く人間は單に肺臟のみならず皮膚の毛穴よりも呼吸するものでこの呼吸が停止されると、生命も亦終る事になる。それ故に皮膚が不潔で毛穴が塞がつて居ると皮膚に依る此の呼吸は非常に減らされその結果身体の全組織が

此事は身體の清潔維持の非常に重要な事と明言して居るそれで如何にして冬期間之に志すか問題である。衆知の如く皮膚の表面は脂肪分を含んで居るものである。それで吾人があまり多く——特に石鹼をもつて——洗ふならば皮膚より脂肪分を除去し、その爲に皮膚は乾燥して皮膚の抵抗力は外部への効果を失つて仕舞ふから吾人は此の事情を忘れずに冬季に於ける入浴を餘り度を過してはならない。スキー家は誰れでも身體の清潔維持の爲に毎日一定した時間を充てる義務がある——此事は規則として確定し得る

ものである。なんとなれば清潔維持と云ふことは健康の維持と効果の獲得の上に睡眠や規則的營養と全く同様に重大な意味があるからである。特に齡若いスキー家は此點に關して適當に説明されて、吾人が往々見るが如く數時間のアルバイトやトレーニングの後で自己の身体を清潔にする事をほんの僅かもせず汗ばんだ儘、そして又着換もしないで自己の毎日の仕事に急いで従ふ、と云ふ様な事が無い様になければならぬ。それでその遣り方は本式に規律や良き趣味、健康等に對する計畫と見做し得る。

スキー家は出来る限りトレーニング後の自己の身体の清潔とマッサージとを連絡して處理せねばならぬ。猶此點に關しては感冒に掛らぬ様に最大の注意を要する。最も適當なのは身体に汗をかいたならば各の更に強いアルバイトの後に微温湯の中で海綿を用ひて洗ひ落し、その後で粗い手拭で充分に擦るのである。既に前に言及した様に、吾人がトレーニングの後に滞在し且入浴やマッサージを注意してやる所の室の溫度を適當に調節する事に最も慎重でなければならぬ。それで蒸風呂の中に盛にある様に熱が風邪の

危険を除外して仕舞ふ所の空氣の溫度をそれより遙かに多く充すといふ事は非常に云ひ度くない事である。

何か塗擦液体を用ひてマッサージをして貰ふ人は豫め身体を充分に清潔にして掛らねばならぬ。之は此の塗擦液体が効果ある様にも毛穴の中に溶け込まなければならぬからである。所が不潔な身体では毛穴が塞がつて居て効果が得られない。

湯の中に長時間續けて入つて居る事は弱める結果を生ずる。激しいトレーニング最中にはスキー家は一週間に二回温浴せねばならない。そして此事は非常に元氣を恢復する効果をスキー家の筋肉に與へるものであるが然し此の湯に浸つて居る時間は十分乃至十五分以上と續けてはならない。入浴には常に充分な摩擦と必要に依つては良きマッサージが伴はなければならぬ。そして最も綿密な注意を拂はねばならないのは、入浴後には戸外の空氣に直接に觸れないで身体が既に涼しく和らけられて良く乾いたならば始めて湯屋を去るといふ事である。若し自分達の住家で入浴する時には以上の注意は多過ぎるものであるが、その時は唯

浴後家に残つて居て、万一若し直接に必要なならば浴後一時間乃至二時間して始めて外出しなさい。浴室と寢室とが相隣つて居る時には就寢前に入浴するのが一番賢い方法である。

冬の間は冷たい水に對して我々の身体を用心せねばならぬ。と云ふ譯は冷水はあらゆる點で筋肉を硬くするが然しスキー家は常に暖く保護せられた弾力に富んだ筋肉を必要とするものであるからである。

マツサージ

科學的實驗は各筋肉勞動は血液中及び筋肉中に新陳代謝を生じ、この新陳代謝の進行中に疲勞の感を惹き起す所の腐敗産物を生ずるといふ事を確定して居る。この増加した腐敗産物は筋肉の効果ある働きを妨げそして此状態は此の腐敗産物が自然に（休息日を加する事に依つて）か、或は何か外部の作用（マツサージ）に依つてか消滅されるまで間斷なく永續しそして筋肉の最初の状態が再來するのである。

筋肉が鍛鍊されて居ない場合には此の疲勞素の除去には

長時間を要する。斯る場合には身体はスポーツマンが通常筋肉炎症といふ用語で表す所の状態に陥る。

熟練した筋肉の場合では新陳代謝が前の場合よりも遙かに活潑でそれで腐敗産物はより迅速に消失し、正規の状態がより早く戻つて來る。

さて吾人が疲勞を感じて居る肢體をマツサージ（撫でる、擦する、捏ねる）する場合には澤山の血が壯んな血液循環に依つて増し疲勞素は新鮮な血液に依つて洗ひ去られ、排除され、そして全身の色々な部分に分配される。それからこの疲勞素の一部は呼吸に依つて肺臓より身体を出で、他の部分は腺の助けに依る發汗に依つて、然し大部分は腎臓排泄物に依る尿として体外に排除される。

規則的アルバイトはマツサージ無しには考へられない。規則正しくマツサージする人は決して適當に摩擦しない人よりも二倍も多くアルバイト或はトレーニングをする事が出來、その筋肉も常に斯る人の筋肉よりもより新鮮で且休息されてあるのである。然しトレーニングを多くすればする程その人はより良いフォームを得、そして樂に競走に打ち克つ事が出來てそして又猛烈なアルバイトにも拘らず規

則正しいマッサージに依つて破壊の危険も取出されないものである。

若しスキー家がトレーニングに僅かの時間のみしか充てる事が出来なく然も一つの確定したフォームにより早く達し様と努力しなければならぬ場合には規則正しい毎日のマッサージが格別目的に適ふのである。

吾人は成る可く専門の知識ある人に依つてのみマッサージをして貰はなければならぬ。といふのは良きマッサージが非常に役に立つと全く同じ程、悪しきマッサージが屢々多くの害を興へるのである。非常に多種のマッサージの種類があるが然し此處では唯スポーツマン乃至スキー家の立場から重要であり且つ目的に適ふものを一言述べて見やう此の様に弱い撫擦、より強い摩擦及び最も強いマッサージ即ち捏ね上げ等がある。上記の順序も亦成る可く常に厳守されなければならぬ。トレーニングの始めでは筋肉は未だ強いマッサージに慣れて居ない。それでまだ柔らかに筋肉を取扱ひ、筋肉が既に多少マッサージに慣れて仕舞つてから始めてより強きマッサージに移らねばならぬ。

撫擦は單に表面のマッサージであつて手掌で以て爲され

る。摩擦は更に効果のある押へ付ける性質のある労働で近く表面だけでなく深く奥にある筋肉をもマッサージする。

然し最も効果のあるのは「捏ね上げ」で之は指を以て個々の筋肉を謂はば取り上げて別々に取扱ふのである。軟らかな手を以てマッサージせねばならぬ。マッサージが宛然個々の筋肉の群れを謂はば満ちた力を以て仕上げるかの様に長い時間續く時は更に効果がある。深く内部にある筋肉層は始めに際しては全々取扱つてはならない。然して身体がマッサージに慣れて始めて取扱ひが所望されるのである。

マッサージを始める前にマッサージを受ける人の体格を吟味する事を止めては不可ない。といふのは此体格に依つて使用さるべきマッサージの種類が左右せらるゝからである。すらりとした人々の場合には一般に良き撫擦が充分であつて精々上腿筋が「捏ねり」に従ふ位である。然るに骨格逞しきすんぐりした身体では若しもマッサージが効果を示さねばならぬなら全く強く取扱はれなければならぬ。

永續的のマッサージに依つて筋肉は柔軟にそして弾力に富む様になる。スキー家は柔軟な細かく發達したる筋肉を有しなければならぬ。疲勞して居るといふ事はどんなにか

不愉快な事か。之と全く同じ程度に我々の全身の豊富なマツサージの後に獲る快感は、人に元氣を付けつゝ又快よくしつゝ生ずるのである。人々は宛然新しく生れ變つた様に快活にそして又アルバイトを喜ぶ様になる。

最も重要なのはトレーニング及び努力したスキー競走後のマツサージである。然も不思議にもスキー家の中にはマツサージを完く忽せにする人々が實に澤山ある。スキー競走最中には筋肉労働が最高に高められ、スキー家は數度已が全力を盡し然して後全く力を使ひ盡して仕舞ふのである。斯る場合に身体が根本的なマツサージに従はなければ數日後に身体多くの部分、特に競走に於いて最も多く要求される部分に或る一種の硬直を感じるのである。毎週々々スキー競走に参加し――あたかも此事が大切な季節に於いて自然に従つて起つた時に――然して自己の良きフォームを保とうと欲する人は良きマツサージ及びそれに續く微温湯又は温湯への入浴は最大の注意を拂はねばならぬ。此事に關してスキー家は常に時間を造らねばならぬ。

スキー競走前のマツサージはスキー家に於いては他の運動の種類に於ける如く非常な重大さを有しない。スキー家

は元々筋肉が加害されない程に天氣に従つて着物を着るものである。筋肉が暖く保たれるといふ事は此處に甚だ重要な事である。

スキー家は家に於いて、住家に於いて又は湯屋でマツサージして貰ふ事が出来る。アルバイトの直前又は直後のマツサージの起り得べき場合はそれ故に除外される。スキー家はミンブルングの練習又はラングラウフのトレーニングから歸宅するや直ちに自己の筋肉の面倒を見なければならぬ。といふのは斯くしてのみ彼等の技術の最高點に達し得るからである。恐らく決してマツサージして貰はずそれにも係はらず協同してする事が出来るスポーツマンが居る。彼等は猶規則正しい先に立つマツサージに依つて多分非常に卓越した技術を持ち得るといふ事を忘れて居る。スキー競走は大低多くの日数を要するもので、長距離競走一七軒大長距離競走(五〇軒)ジャンプ及び梯隊競走が通例引續いてある。斯る機會には規則正しくマツサージする人はどんなマツサージにも従はない様な競走者に對して疑ひも無く非常な利益の立場にある。勿論此の事は大人同等の階級にある個々の人々の上のみ關係があるものである。といふ

のは三人のアメリカのマツサージ師がマツサージしてすら無益な程のスキー競走の出来ない人は、マツサージして貰つたのにも係らず第一流の結果は何物たりとも示す事が出来ないといふ事があるからである。然し他の場合よりも一層良いのはその人にとつて専門の技術を有せる同等の相手である。然し専門的に同じ高さに達した二人のスキー家が對立するときは規則正しくマツサージする人は自己の身体保護に就いてより少なく注意する相手に絶對的に打ち勝つのである。吾人は身体の状態に於ける差違を認知する事を一度やつて見なければならぬ。

塗擦液体を用ふるマツサージは特に強いトレーニングや競走の後に於いて良き効果を得る爲のマツサージである。然も吾人は常に塗擦液体は熱を散ずるものでなくて反對に暖ためる効果を働くものであるといふ點に注意しなければならぬ。スキー家は自己の筋肉を常に暖かく保たねばならぬ。といふのは斯くする事に依つて筋力は柔軟に且つ弾力に富める様になるからであるが、然るにすべて冷たきものは之を妨げる。即ち筋肉が硬くなる。

一般にスキー家はマツサージに於いて非常な注意を示さ

ねばならぬ。冷却を豫防する爲に常に暖められた室でマツサージしなければならぬ。闘技者、蹴球家、水泳家又は漕艇手等は夏期に於いて躊躇なくマツサージ用長椅子の上に脱衣して横になる事が出来る。それを冬では暖められた室内でやつてもその上に危険な事が屢々ある。マツサージは機能亢進の上にどんなに効ある事か、それと全く等しく吾人が充分な注意を拂はぬときマツサージの健康に及ぼす害は非常なものである。吾人はマツサージに際して皮膚を無理に引つばらない様に保護せねばならぬ。若し強く皮膚を引張るときは軽い毛根炎症を惹き起すからである。マツサージに従ふ身体の足或は外の部分にひどく毛が生えてゝその爲に毛根炎症を起し易い人には滑らかな液体を用いてマツサージをして貰ふ事が勧められる。

此目的の爲に英國製のエリーマン會社のエムプロケーシヨン、或は同様な化學的調合物の他の薬剤が最も良く施される。此の製品の全部を以て此の粘々する乳狀液体が完全に皮膚の毛穴の中に消滅して仕舞ふまでマツサージして貰はなければならぬ。吾人が誠實に上述の言に従ふならば吾人は暖き快感を與へられ此の快感が筋肉を著しく柔軟に

し且良き状態を吾人に得せしめるものである。斯の如き種類のマツサージを行ふに先立ちて豫め全身を微温湯又は温湯で洗ひ去るといふ事が提供されて居る。斯くする事に依つて毛穴は開きエムブローケーションが自由に浸透する事が可能になる。之に反してマツサージの後でエムブローケーションは洗ひ去られては不可ない。然らざればエムブローケーションは効果がなくなつて仕舞ふ。それ故に吾人は最後の塗擦の前に始めて身体を洗ふべきである。適當な塗擦料が何も手に入らない場合には微温湯の或は温湯の石鹼水が代りに役にたつのである。

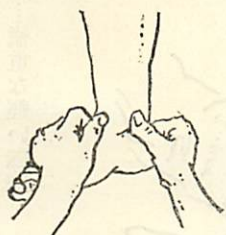
吾々は又自分でマツサージする事が出来るが然し猶効果ある良きマツサージは常に、第二人者に依つて行はれるマツサージである。専門の知識あるマツサージ師の缺乏の爲に自己マツサージはなんとしても一般に全くマツサージ無しより更に良い。特に最も重要な脚筋を各人は自分でマツサージをする事が出来て一般にマツサージしない人と反對に此の事から著しい効果すらも引き抜く事が出来る。必要な場合には二人のスキー家が特に二人が一家に住んで居る場合には時々共同してマツサージし合ふ事が出

来る。此の方法は兎に角理想的な解決ではないが、猶常に一般に全くマツサージしないよりも良いものである。

常に心臓に向つてマツサージしなければならぬ。即ち吾人は例へば脚部マツサージに際しては踝より始め、然る後下腿に移り最後に股がマツサージされなければならぬ。一般にマツサージに際しては貴い内側の部分が少しも壓抑を受けぬ様に大いに氣を付けねばならぬ。それで吾人は例へば腋や柔らかな部分——之は仰臥に於いて股をマツサージする時に——觸れては不可ない。斯の如く腎臓部の筋肉腹筋その他一般に取扱ひ難き危険で臑が表面近くにある身体の部分例へば膝關節に於ける筋肉は非常な注意を持つて取扱はねばならぬ。

筋肉労働に於いてより強く要求される身体の部分のみマツサージされるべきであると信ずるのは思ひ違ひであらふ唯一般に全身に及ぶマツサージが實際に効果があるのである。上の如きマツサージに依つてのみ疲労素は出来る限りの廣い表面に分散され得、そして此の爲により容易に体外に逐ひ出される。頭部及び頸部は脚部、腕部及び背部と全く同様にマツサージされなければならぬ。私は、アメリカ

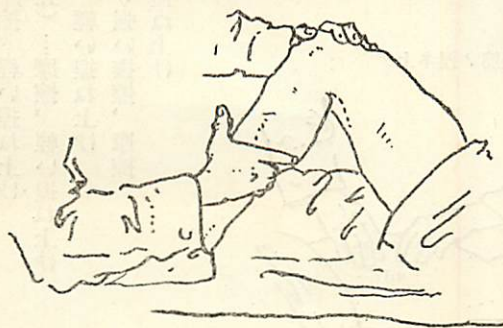
第二八圖
踵ノ力筋ノ摩擦



第二九圖 下腿筋捏ネ上ケ



第三〇圖 下腿筋ノ取扱ヒ方



の或は、黒人のマツサージ師がマツサージ用長椅子に横になつて居る世界的力士候補者に對して耳を強く摩擦してゐたのを觀察した機會が屢々あつた。然も斯る強きマツサージは又適當な効果のあるマツサージであつた。

スキー家の場合では身体の全体が強いマツサージを受け
る事が特に重大な事である。と云ふ譯は長距離競走に際し

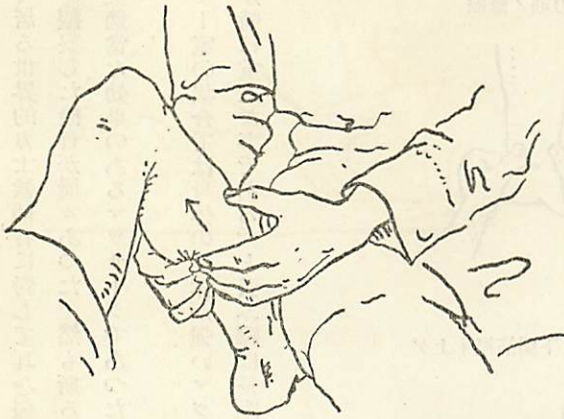
ては單に脚部のみならず、猶又腕、肩、胸、背腰等の諸部分の筋肉が働き全筋肉が連絡ある筋肉労働をするからである。

マツサージの順序は次の如し。

1 仰臥して

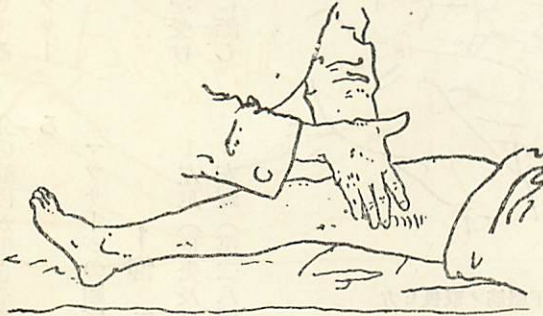
- 1 左足（足先及び足の裏）… 撫擦、摩擦
- 2 左踝（第二八圖）… 撫擦、摩擦

第三一圖 下腿筋ノ捏ネ上ゲ



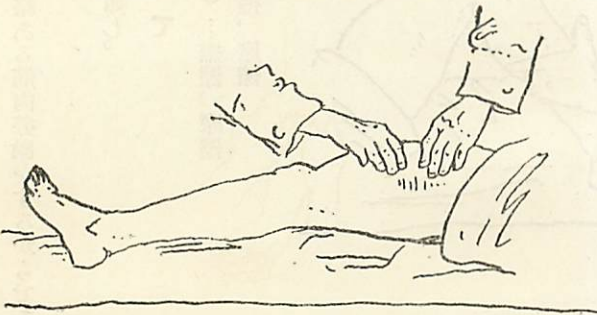
- 3 左下腿(第二九、三〇、三一圖) ……捏ねり
- 4 左膝の部分の筋肉……慎重な撫擦
- 5 左上腿(挿畫三二、三三、三四) ……捏ねり
- 6 — 10 同様な事を右足に就いて爲す
- 11 腹筋……慎重な軽い撫擦

第三二圖 上腿筋ノ捏ネ上ゲ

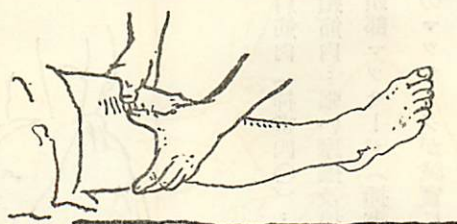


- 12 左及右脇腹……摩擦、軽い捏ね上げ
- 13 胸筋(挿畫三五) ……摩擦、軽い捏ね上げ
- 14 頸部筋肉……摩擦、軽い捏ね上げ
- 15 頭部筋肉……より強い撫擦、摩擦
- 16 左手……摩擦、捏ね上げ

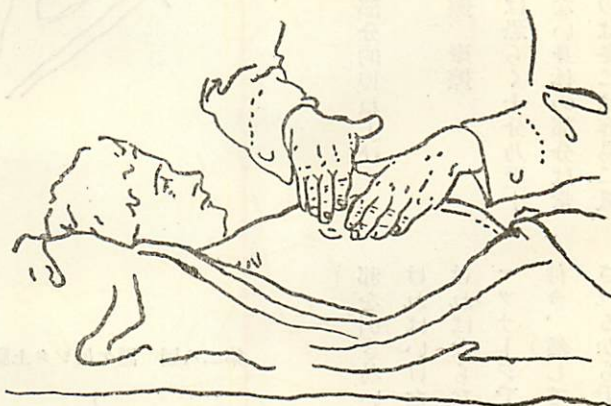
第三三圖 上腿筋ノ捏ネ上ゲ



第三四圖 上腿筋ノ捏ネ上ゲ



第三五圖 胸筋ノ摩擦



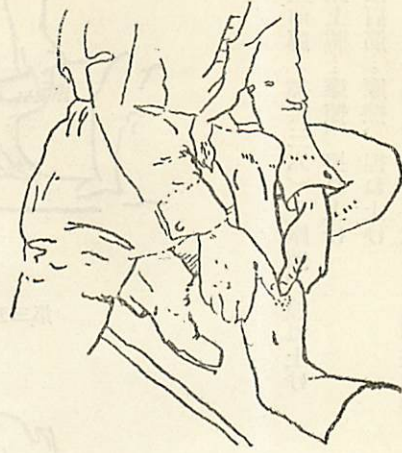
第三六圖
前腰筋ノ取扱ヒ方



- 17 左前膊（挿畫三六）…摩擦、捏ね上げ
 18 左上膊…摩擦、捏ね上げ
 19 左肩筋…摩擦、捏ね上げ
 20 — 23 右腕及び右肩に就いて（挿畫四〇）
- 2 俯向きに臥して

- 24 下腿を支持して（挿畫三七）
 左股を支持して…強い捏ね上げ
 25 右上腿を懸け吊して（挿畫三八）…強い捏ね上げ
 26 左右兩側の臀筋肉（挿畫三九）…強い捏ね上げ、摩擦
 27 腎臓部の背筋肉…非常に慎重な摩擦

第三七圖 支エタ下腿ノ捏ネ上ケ



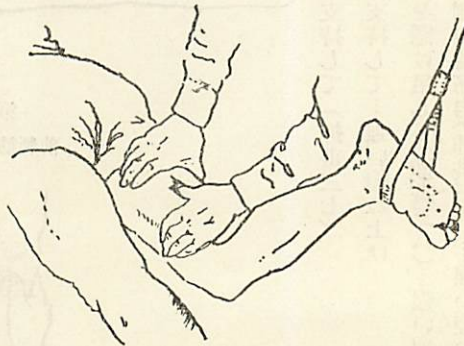
28 肩筋肉 (挿畫四〇) ……強い摩擦、部分的捏ね上げ

29 頸筋肉…強い摩擦及捏ね上げ

30 頭部マッサージ (挿畫四一) ……撫擦・摩擦

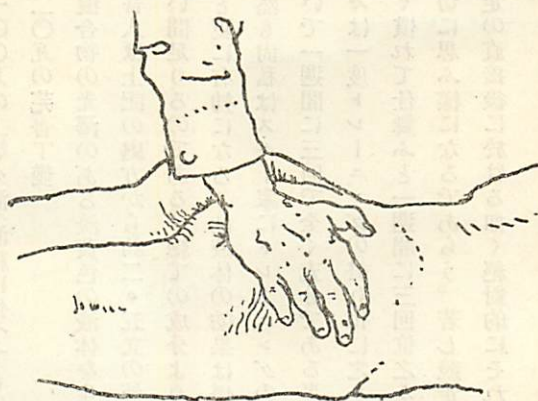
此のマッサージが誠實に行はれるには恐らく十分乃至十五分を要する。マッサージを受けて居ない身体の部分には常に蔽はれて居なければならぬ。といふのは冬には容易に風

第三八圖 懸ケ吊シタ上腿筋ノ捏ネ上ケ



邪を引き易いからである。特に腹は常に用心深く保護しなければいけない。入浴後は身体は出来るだけ拭き取られなければならぬ。此の拭き取る事はそれだけで、より弱いマッサージである。といふのは拭き取る事には摩擦が結び付き、然して此の爲に皮膚は刺戟され血液循環は強く促進されるからである。

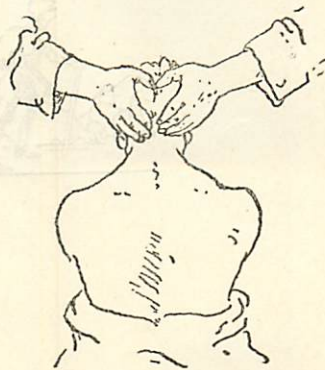
第三九圖 腰及ビ臀部ノ摩擦ト捏ネ上ゲ



第四〇圖 肩及ビ首ノマツサージ



第四一圖 頭ノマツサージ



各在來の塗擦料は之が暖める効を生じ然して皮膚に對して無益であるならばその目的を果す。然し大抵の人々は此の塗擦料を最も廉價に得る様に努力せねばならないので、私は茲に私を得る事が出來た所のアメリカの輕力士が非常な効果を以て使つたマツサージ材料の處方を公にする。各人は此の處方を廉價にそして家庭に於いて調合する事が出

來そして斯くして同様な塗擦液体を澤山の金を掛けて求める事を省く様になるであらう。塗擦はエリーコン會社のエムプロケーションを用ひてする場合と全く同じ方法で行はねばならぬ。使用前に身体は根本的に洗はれそして拭き取られ然る後塗擦が此の液体が皮膚の表面から完全に消滅する迄なされる。その後にはどんな種類の洗淨も許されな

いのである。

此の塗擦料の調合には次のものが必要である。

七卵黃

一立の酢

一立の純粹なテレピン（松脂精）

七〇瓦の樟腦

一〇〇瓦の上等火酒（酒精に依つても代用され得）

二〇瓦の芫菁丁幾

此混合物の光澤のある淡黄色の液体を生ずるまで振られる。吾人は上記の處方から約二・五立の液体を得、之は勿論長い間足りるのである。總ての成分より單に半分の量を取ると更に有効になる。此液体の効果は優秀なるものである。然も尙私はスキー家にトレーニングの終り毎に之を用ひないで一週間に三回で全く充分である事を提言する。即ち吾々は一度トレーニングの終り毎に之を用ひる事に餘りに多く慣れて仕舞ふと一週間に三回位之を用ひた方がよいと痛切に思ふ様になるであらう。若し競走の前日に於いては競走の直接後に於ける如く絶對的にそれを使用せねばならぬ。

〔附加〕

捏ね上げ……Kneten

摩 擦……Reiben

搥 擦……Streichen

誤譯の御叱正を希ふ

譯

者



其の頃

廣田生

測 量

午前八時。

さあ行かう。遅くなるといけないからね。

今日で三度目の測量だね。

その測量。それは學校の日課の測量でもなければ、御役所から頼まれての測量でもない。そして又自分一人が楽しむ場所を作る爲めの測量でもなかつた。

皆な自分達を中心とした北大スキー部といふ大きな有機体の現在、將來までの賜物となる貴い労働であつた。

頼まれたつてあの重い三脚やトランシットを擔いで山の斜面を——よしんばそこが近くとも——行きつこないんだ

が、團体の大きい力の偉大さは永久に一人や二人の小さな障碍で損はれるものでないやうにつくづく感じた。

始めの測量は一直線の斜面で何處の部分をとつても三十度以上もあり相なところであつた。シャンツエを取り附けやうとするとまるで四十五度にも、五十度にも盛り土をしてかゝらねばならないやうな處だ。第一回の測量結果は明かに失敗であつた。

又次の日曜か。とうとう雨が降つて行けなくなつた。

又の日曜は大したお天気だ。

又人数をかり集めて、赤い地にスキー部のモノグラムを染め抜いた旗でトランシットを包んで大切に擔いで三角山の麓へたどりついた。無論赤白の測量のポール持ちも居る譯だから交る交る重いのと軽い道具とを脊負つて居るのが

ゆづり合つては行つた。

此度は先日見立てゝ置いた處を先づクリノメータア測量をやつて、それからトランシット測量をやつて歸つた譯だが、左右を餘り正確に測らずに、たゞ一本の測線を測つて來ただけであつたが、作圖して見るとなかく有様な形をして居るので、愈々次の日曜にはガンツ完全に測量することゝした。

もうその頃札幌は新緑の候であつた。

豫科の試験ももう直きに來さうである。

だが本邦創始で、且つ唯一を誇るに足るスキー用の固定飛躍臺の建設にとりかゝるのである。少し位の犠牲に苦情が出る筈がなかつた。またそして苦情を云ふ人も居なかつた。それだけスキー部の氣勢が一つの力の方に向いて居たのであつたらう。然し口に出さねど随分不服の人もあつたかも知れぬ。

かうして一方にのみ部の力が強く注がれることになることも埋れて居る、衰へて居る力は其當時の山の方でも畑の方でも亦所謂燕麥黨の方にも見出されなかつた筈であつた。今の學校のスキー部の固定ジャムピングヒルが出來上る。

——まあ此程度ならと云ふ處まで——までには三年もかゝつて居る。凡べてが經濟的のなやみからであつた。

それでも細川さんや、横さんやの御厚意によつてスキーフィルムを拜借し、部員が皆總出働きで幾分浮いた金と、文武會から貰ふた部の豫算とからで漸く出來上つて來た譯であつた。シャンツエの丘へ行つてシャンツエに腰を打ちおろして近くは琴似、札幌から遠くは石狩河口の山々、乃至はメタツクの方を見て心を慰むるに足るが、シャンツエの工事の後を見ては涙ぐまずに居れない。

少くとも私はさうである、それは記録が出ないからではない。又丘へやつて來る人達がいたずらをして行くからでは無論ない。工事の貧弱さ——金のない爲に來る——そんなものでは無論ない。

私の涙は血に燃えた熱い涙である。これだけの工事を俺達の微力でしたのであるか。二、三の者の頼みにわざ／＼貴い日曜の一日を、凡べてを投げ棄てゝ手傳ひに來てくれたかと思ふと、本當に心から感謝の涙が流れるのであつた。札幌の人家、新しい壁板の数は手にとる様に近く殖えて行く、この場所、この丘も何れは家並の傍近くに立つの

であらう。或夏の日でもシャンツエに立つて、それが出来るまでのことなど回想して居たなら、それこそ盡くることを知らない。

不日その懐しの丘に立つて見た。籠にはもう立派な牛か馬を飼ふ新しい家が出来て居るではないか。生産を目的として、やつて来る人の爲に、愈々我等のシャンツエまでが恐れを感じる時代になつたのか。牛と馬は遠慮もなく丘のランディング斜面を横切つて道をつけて終つた。牧場の主に訴へた處でこたへる筈がない。俺達はもつと良い場所を求めて。改造の道に一步を出さねばなるまい。

友

豫科へ入つて、卒業して行くまで殆んどスキ一の合宿といふ合宿を一緒に續けて来た友が一人僕にあつた。誰でも今僕と友となつて毎日顔をつき合せて居る人はそれが誰を指して居るかを知るであらう。

二人は所謂スポーツとしてのスキ一のジャムブの日本に於ける創始を自覺して居た。

友もよく其頃飛んだ。そして僕も一緒に飛んで轉けて居た。今でこそ一挺のスキーが折れてもそのかけ代へには心配はいらなくなつたが、その當時は、とつときの一挺が折れると本當に泣かずに居れなかつた。勿論金はかゝるが、上手に作つて呉れる店がない。又自分達も本當にジャムブのスキーがどんなのが良いのか、どんな形に作れば良いのかといふ見當さへつかなかつたのだから無理もなかつたと思ふ。

僕は友の心配氣な顔つきを一度も見たことがなかつた位であつた。それ程愉快な友と交際合つて居ただけ自分の性向にも幾分響くところがあつた。

友の良い癖か悪い癖か、兎に角電氣がつくとすぐ寝る癖があつた。その代り朝六時には必ず眼を醒まして新聞を讀んで居た。

何時も二人で語つて居た。

どうせ世間の人が何と言はふと最後まで頑張らう。

僕は或年輕い感冒から体を痛めかけた。そして一冬どうしても無理なことが出来なくなつた。止むを得ず勉強した無論スキーの方だ。外國の方の本を六ヶ敷からうが、易し

いものであらうが、兎に角讀破した。そして友に實際を試みて貰つて私はやつと安心したことは再度ではなかつた。

で私は考へた。誰か旨い人が教へてくれたら無暗につまらん考へ方をせなくとも濟むんだが。そして餘りに考へ過ぎることも發達を妨ぐる一つであることを知つた。

友は或冬のスキーの大切な競技會で不時の怪我をした。

見舞ふてくれる人も多かつた。

恐らく誰の悲しみよりも深い、大きい悲しみを持つて居たのは僕であつたと思ふ。

僕は七年といふ永い間本當にスキーを中心にして、その友とは切つても切れ相もない縁にあつたと思ふ。

友は怪我をした時ほんとに泣いて居た。何故泣いて居たんであらう。それは僕には判らなかつた。痛くて泣いて居た譯でもなからうし、又判り切つた優勝を棄てねばならなくなつたからでもあるまい。凡べては親に對する孝心の道を知つての熱い涙であつたのだ。

友は本當に親孝行の男であつた。敵を持たなかつたといふ點でも偉いところのあつた男である。要領が好いなどと云ふと却て惡意に解され易いが。本當に好い男であつた。

友は別に筆をとつてもものしたことも餘りなかつたが、然し書かせたり、物を話させたりすると大へん要領の良いことを云ふ男であつた。實際たしかに頭の良いところがあつた。そして何時も落ついた生活を送つて居た。いくら迫る様な場合に出會つても狼狽おぼててることをしなかつた。

友はもう居ない。楽しい家庭の人となつて居る。友の健康とフラウの健康を僕は友の爲に祈りたい。(二六八、二〇)

小澤の合宿

札幌の地上では僅かに冬の名残りを止むるに足る、捨てられた推雪の上に、いつぱいに黒い塵埃が積んで居る。

太陽はカン／＼と照りつけて惜し氣もなく殘縁を刻んで行く。

何處の野を見ても、街の郊ちやうれを歩いて、もう冬らしい姿は消えかゝつて居る。

手稻の山に紫紺にかゝる雲を見ては、又明日の上天氣が想はれる。

西の空は愈々紅に染んで行く。

嗚呼冬の姿はもう又來る年を指折らすのであらうか。

都會の冬、郊外の名残り、一つとして悲しいものばかりだ。冬の間、落ちついて街の路々に捨てつけられて居た馬糞の顔を出して來たのが、洵に小憎らしく感ぜられる。

都會に春の匂ひがして來ても、郊外の残雪が指呼せらるる様になつても、未だ北海道は四月だ。未だ自分達の此シーズンの終りに仕末をつけて括らねばならない仕事があるんだ。

友四人と札幌を立つたのは已に三月の末であつた。

何となく詩趣に満つやうに思はれる岩内の街へ通ずる唯一の鐵道岐點、此處小澤は未だ札幌や小樽などの都會に比ぶるならば、冬の衣に包まれて春の熱は燃え盛えて見えな

い。
四人のスキー服の友、一体何をして居るんだらう。毎日小さい雪の臺を作つては、上の方から滑つて來て、空中へ飛んで、雪上に落ちて滑つて居る。轉んだり、轉ばなかつたり。友はとう／＼スキーを折つた。

遠くに見えるニセコアン、ワイズ・ホルンを始めシリベシの連山は毎日の春光にも怖れぬ様に、眞白な冬衣に包ま

れて偉容を見せて居る。

とう／＼四人のハウプトシユプリンゲルが完全に準備して行つたスキーまで、御叮嚀に折つて、しかも飛躍レコード十五米足らずを残して歸札の途につかねばならなくなつた。何たる悲しいこつた。未だ飛ぶのには充分の雪があるんだが。でもスキーが皆折れつやつちやお終ひだ。

毎日ゲヂヒトを傷けたり、アフタアをぬらしたりして苦勞を重ねて歸る四人の友。さびしい様だが和氣霽々として歸途につく。いろ／＼と骨折つて下すつた大矢さんと小澤の驛でお別れしたのはもう停車場附近の雪が殆んどとけ出して居た時であつた。

ハウプトライタルは已に世界的大學者になつて居る。均さんなんて今でも云つては居るが、失禮な言ひ分だ。京都帝國大學理學部の教授理學博士木原均氏である。僕を純に育てはぐんでくれた一人だ。嗚呼愉快な憶ひ出での春の合宿も済んで行つた。

大雪からトムラウシへ

武野穀 二 郎

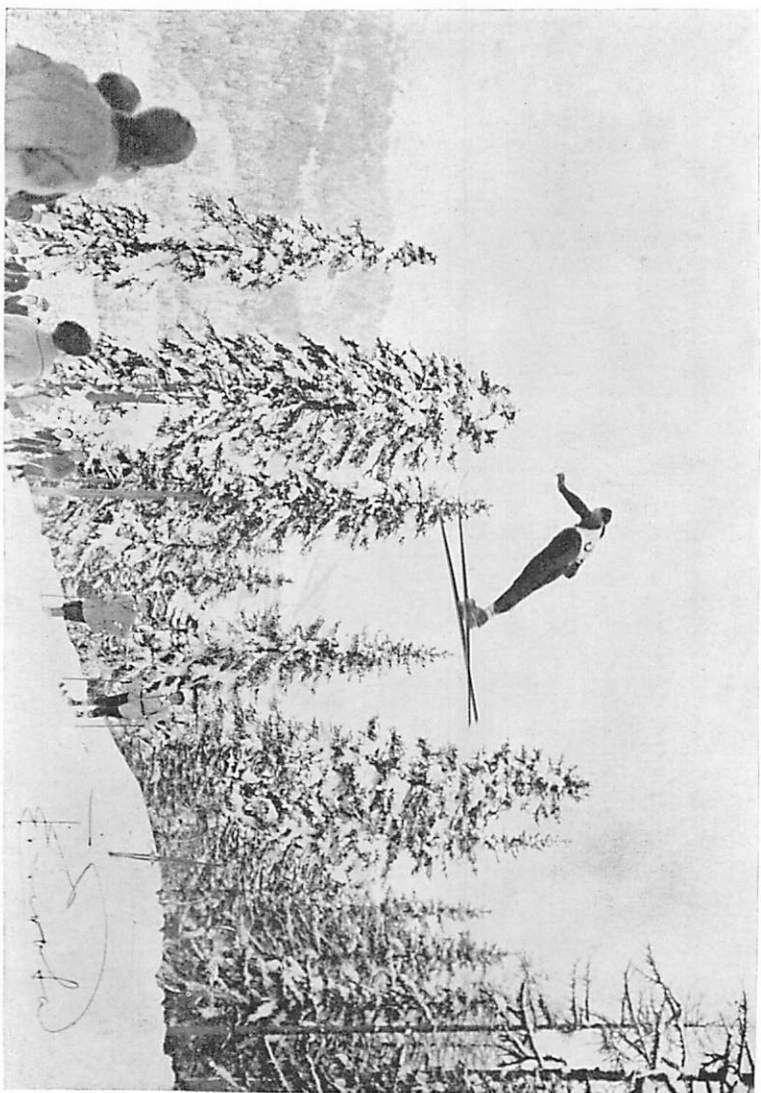
鬱陶しい天氣が幾日か續いた。初めの二三日は只空を眺

めて過して失つた。何をしても手に付かぬ、私の心は行きたい心持で一ぱいだつた。併し一週間閉ぢ込められた時私は山への心持がうすらぎつゝある事を知つた。もうどうでも良い様な氣持が時々浮び出る。斯んな事で遂に行けなくなるんぢあないかと云ふ淋しい豫感がしてならなかつたので思ひ切つて出發する事にした。こんな時に急に澄み切つた空を見ると實に有難い様な氣がする。そして一時に体がのびのびする様に誰でも思ふものだ。私等の場合が丁度そうだつた。

汽車が旭川に着いてしばらくすると夜が明けた。不思議な程明るい太陽が照り出した時は實に嬉しかつた。そして走る雲が何となく小膽に隅の方へかくれ込んででも行く様

に見えた。

十時過ぎに私等は層雲溪から黒嶽への元氣な一步を踏み出した。見晴臺に出る頃已にリュックはヒシ／＼と肩に喰ひ込む。針葉樹が絶え潤葉樹が絶え、黒百合、シヤクナゲ等が咲いて來た。やがて頂だ。省ればニセカムシユツベが立派な山容を澄み切つた空にさらして居る。黒嶽の石室にリュックを置いて直ぐ北嶺嶽へ向ふ。苔の間に高山植物が咲き誇つてる。ツガザクラ、ガンユウラン、イワヒゲ等が澤山あり可憐な唇を開いてゐる。一步柔かな苔の反撥を感じる。しばらく頂で周圍の景色に見とれる。逆光線で非常に美しい比布愛別嶽の向ふ遙かに石狩平原が霞んでる。目的のトムラウシもかすかに見える。勿論大雪の山々は一望に納める事を得る。大雪山は立派な噴火口を持つた火山で



Carlson 君の飛躍振り

あるが、併しその山の感じは非常に柔かい丸味を帯びてゐる火山である。

頂から東に走る雪溪を一氣に滑り下りる。時々クリスチヤニヤの眞似なんかをして見た。黒嶽石室はまだ時季の早いためかから空きだ。吾々二人の外誰も居ぬ。宝番の爺さんの焚いてくれる爐にいぶされながら寝についたのは九時頃だつた。外はすつかり晴れて細い三日月が窓から見える雲の影さへ見えぬ。

四時半爺さんの聲で目が覺めた。外は勿論上天氣だ。今日は行ける處まで行く積りで、五時四十分出發した。北海嶽の頂に達したのが六時四十分、大噴火口から流れ出る川を渡る雪溪の上には古いながら熊の足跡が澤山印せられて居た頂でしばらく寫眞をとつたり寫生などする。旭岳が目前に立つてゐる。雪溪が陽に照り返へる。之れから白雲嶽までは立派な道がついてゐる。高山植物が到る處に香を漂はす。白雲の登りに掛ると踏は自然に消えた。柔い苔を踏んで頂に着いたのは七時五十分、此處の眺めは又素晴らしいお花畑で名高い高根ヶ原が直ぐ足もとから忠別嶽まで續く實に廣い高原である。偃松の群落の間に沼がボツリ／＼と

點在して居る。是から通らんとする刈分けが忠別嶽の手前まで良く見える。忠別嶽を越して化雲岩の凄い崖の彼方に私等の目的のトムラウシの壯嚴な姿がくつきりと空に抜んで居る。私等はしばし見つめた。十勝嶽からはゆらゆらりと噴煙が昇る。

黒嶽の石室もこれで見おさめた。一晚泊つたと思ふと何となく心残りがする。眞青なニセカムシユツベをバックにした黒嶽も仲々美しい。北嶽の昨日滑つた雪溪をあかず眺める。此處で三十分ばかり延びる。いざ下る時になつて行く手に約三軒ばかり先の草の上に黒い點が見える。良く見ると動いて居る。どうも熊らしい。あんまり良い氣持もしない。盛に笛を吹き歌を歌ひながら噴火口に別れを告げて降り初めた。高根ヶ原へ續く雪溪の縁を偃松をよけながら歩く、相變らず苔に敷きつめられて居る。所々に砂地がある。コマクサが一きは目立つ。高根ヶ原のお花畑は噂の如く美しい。青い苔が五彩の色で飾られ云ふに云はれぬ香が鼻をつく。圖(旭岳)の一七八一米の邊には石狩川の方の側の崖下に沼が澤山あつて氣味の悪い緑色をして、ざら／＼光る炎を立ち昇らせてゐる。確か湯の澤の温泉も此の

邊である。此の邊から忠別嶽の下までは相當深い偃松の海だが幸に立派な刈分けがついてゐる。刈分の中はすつかり苦に覆はれ氣持良い筈だが、暑さとリュツクの重味が体にこたへる。忠別嶽の下で一息を入れて一氣に登る。頂に着いたのは丁度十二時半、もう大雪からは餘程來て了つた。

今日のうちに一八八二の尾根を樂に越せそうだ。時間はずぶりある。うんと休む事にして晝食のパンに舌鼓を打つ。忠別嶽は臺地の發達した様なものだ。只西側の忠別川への澤の方が相當凄い崖になつてゐる。此處からばニヘソツ、石狩嶽の雄姿が手に取る様だ。此處の景色も又格別だ。後に大雪山彙を控へ前には化雲岩の崖に對しトムラウシの氣持良い頭を望み得る。トラムウシは此處から見た形が私は一番好きだ。此處等あたりは斷然雪が少い。一八八二米へ取り付く尾根には雪があると思つて居たが一つもない。が幸に尾根に刈り分が見える。そしてヌタブヤンベツの澤もそんなに深くは入つて居なかつたので安心した。一時半下の刈分を目指して下る。

一八八二への尾根の刈り分は随分荒れて居る。そして又處々方々で切れて居るがそんなに大きな偃松ではないので

割に樂だつた。二時五十分一八八二米へ着いた。丸い形の沼の原山の手前に五色ヶ原を通して幾つもの沼が光つて見える。此處に至ると偃松は俄然大きくなつた。且刈分は全然利用に堪えない。仕方なく化雲岩を斷念し殆ど等高に少し下り氣味に進んだ。偃松は大きく且非常に密生してゐるので随分時間が掛つた。五時一六八二米の北側の澤の上の雪溪の下を露營地とした。偃松の枯木が澤山轉つてゐる。薪を切る必要はない。水あり薪あり絶好の場所だ。六時半には夕飯も終つて了つた。焚にあたりながら今日の行程を思ひ出す。一日の疲がぐつと出て來る。白雲嶽を越えて一日でよくも此處まで頑張つたものだ。幸に熊も遠望したのみで濟んだ。高根ヶ原のお花畠が目の前にちらつく。雪解けの水の冷さが未だ喉に残つてゐる様な氣がする。夕空にトムラウシが紫色に浮び出る。薄い雲が前の丸い山との間をかすめて通る。トムラウシの色は益々濃くなつた。脊中の方が段々と冷えて來る。あたりは夕闇が迫つて來た。明日のパンの仕度をしてテントに入る。トムラウシの頂が微かに見分けられる。高山植物の褥は柔い。

暗いうちに目が覺めた。天幕の隙間から顔を出す。星が

見えない。曇つてゐるのだ。まよと思つて又シユラーフ
ザックにもぐり込んだ。Nの聲に目を覺ます。丁度四時半
だ。早速空を仰ぐ、雲足が非常に早い。トムラウシは全然
雲に包まれてる。何となく面白くない天氣だおまけに昨日
と變つて生温い風が吹いてゐる。兎に角朝飯を済ます。し
ばらくトムラウシの方を眺めて二人とも無言だ。折角昨日
頑張つたかひがない。

そうこうするうち雲は切れて來た。薄日があたり出した
天幕をたゝんで出發したのが六時、圖の瓢形の沼と化雲岩
から南に走る尾根の間に向つて進む。三十分位で沼の上へ
出た。成程此の邊の地形は地圖と異なる事夥しい。沼は本當
に向きが反對だ。そして圖の丸い山がもつと西により沼か
らの澤が丸い山の右側を巻いてトムラウシの方へ入り、
丸い山と此の澤を隔て、化雲岩の尾根が相對してゐる。此
の邊には小さい尾根が澤山ある。天氣は恢復して來た。最
後のうすい雲がトムラウシの頂を去つて再び前日の如き晴
天となつた。化雲岩からの尾根には雪庇があるので吾々は
樞松を漕ぎながら等高に沼からの澤へ出た。ぢり／＼と暑
さを感じる。雪解の水に喉をうるほす。澤には石が非常に

多い。石を飛びながら進むとなんだか馬鹿に道が拂る様だ
澤を登りつめると大きな石のある小さい尾根がある。此の
邊りは残雪と苔の交錯だ。此處にも高山植物が咲き誇つて
ゐる。苔はすっかり乾き切つて丁度霜柱の上を歩く様な氣
がする。此の石の尾根を越すと愈々トムラウシ沿への登り
だ。百五十米ばかり登ると目前に沼が展開する。二千米の
高さにある此の沼は浮世とは一切かけはなれて清水を湛へ
て安らかに寝つて居る。向ひ側に大きな残雪が半ば水に浸
つて水の中深く深くから青い影が浮び出してゐる。沼のほ
とりは一面のお花晶、すつとする様な香氣を漂はしてゐる。
何と云ふ靜かな景色だらう。自然の力は澄み切つた鏡の上
に大理石の彫像を立たせ夫の周りを花で縁取つた。私等は
此の水に手を浸す事さへ此沼の神聖を犯す様な氣がした。
しばらく沼の靜かな聖氣にうたれて愈々頂へ向つた。苔む
した石を導つて頂への一步一步がぞくぞくする程身にしみ
て嬉しい。九時四十分吾々は遂に目的のトムラウシの頂に
立つた。私等は何とも云ふに云はれぬ幸福に浸つた。それ
は登山者のみが味ふ幸福だ。汗にまみれて克ち得た眞の幸
福だ。

石狩嶽、ニベソツが手に取る様によく見える。南には日高の尖つた頂、十勝、下ホロメツトク、オプタテシケの連山をあかず眺めた。一時間半と云ふものを私等は完全にギブエルグリュックに浸つた。スマヌブリの方から雲がおし寄せて来た。吾々は雲に入らないうちに急いで奥硫黄嶽への尾根に向つて下つた。願はれは三十分もしないうちに已にトムラウシの頂は雲に閉ざされた。私等は僥倖を得て居たと云つても良い様な氣がした。大雪からトムラウシまで私等は如何に天候に恵まれた事だらう。そして今頂を去れば已に閉ざされてるではないか。私等は心から感謝の意を天に捧げた。去年トムラウシから松山温泉へ出た人等がクワウシナイ川の上の方で瀧に惱された事を聞いて居たので私等はトムラウシと奥硫黄の尾根の間から北に擴がる廣い臺地を通る事にした。此の苦地は地圖にも名を付いて居ないし、又誰も話す人もないが、尾根から圖の一四七三米の頂を目指して臺地の約一里位の間は一本の木もないと云つていゝ位、立派な草原で高山植物の繁茂にまかされてある。イハイテフが非常に密生してその濃い綠色で私等を喜ばした。又キバナシヤクナゲ、ツガザクラの類、コマサク

ラ等が處嫌はず咲いてゐる。此處も亦立派なお花畠だ。私等は止むなく花を踏んで歩かざるを得なかつた。高根ヶ原も美しいが此處のお花畠も素晴らしい。おかげで此處の邊りは非常に歩き易かつた。一四七三・七に近付くに從つて小さな水溜りが無數に散らばつて夫が根曲り笹と偃松と交錯して私等の歩調を亂した。一四七三の一つ手前の尾根の手前からクワウシナイ川の合流點の少し下流の處に向つて小さい澤を見付けて降つた。途中十二三米の瀧が一つあつた。相當苦心してやつと下りた。あとは時間は随分かゝつたけれど樂にクワウシナイ川に出られた。丁度四時半だつた。トムラウシの頂からクワウシナイ川に出るには化雲岩から來る澤とトムラウシからの澤の合流點までは非常に瀧が多く下り難いからトムラウシから奥硫黄に至る尾根を下り尾根の中頃から一四七三・七を目掛けて廣い臺地を斜に切りクワウシナイ川の合流點の下を目掛けて澤へ下るのが一番良いと思ふ。つまり私等の通つた處を推賞する様なわけだ。そうすると非常に樂で、且臺地の氣分、お花畠を享樂する事が出来る。露營地を捜しながら大分下つて六時頃キヤムブに取り掛る。明日は愈々松山温泉、おまけに黒嶽

の石室を出てたつた二日で此の澤へ来る事を得たので、随分食料が餘つて了つたのです。つかり豪遊を極めた。只釣道具を忘れたのは返すがへすも残念だつた。

少し寝坊して七時に出發した。成るべく徒渉を避けてへづれるだけへづつて下る。氣が樂になつたためか澤の景色が非常に目に入る。澤歩きも仲々面白い。これからは瀧もないし樂なものだ。しばらく下ると鮎を釣りながら上つて来る人に會つた。なんだか懐かしい氣がして早速挨拶をかわした。ボンクソウンナイ川の小さいのにも驚いた。雪の少いため水も少く澤も非常に樂だつた。二時には松山温泉



に着いた。しばらく温泉に浸つて想ひを山に廻らす。

愈々今日は歸へる日だ。七時に松山温泉を出た。大きな藓が私等に朝露を投げ掛ける。忠別川は愈々川巾が廣くなる。十時頃私等は遂にクローバーを踏んだ。道は畑の中に出た。山は終つた。

松山温泉から忠別發電所迄の路は随分長く感ぜられた。かくて私等は僥倖だと云ひ得る天候をつかんで幸福な山歩きを終る事が出来た。

最後に此の行を共にし私をリードして下さつたN兄に厚く感謝します。(一九二九、七、二〇)

路面スケッチ及び地圖の作り方

ホレイス・ケフアート

(Horace Kephart)

森田昇譯

未開の地に於ける人生の快樂の中で新しい土地を踏査する竦動を私は第一に擧げる。其處には何物かゞ潜んでゐる。さあ行つて見出さう。此の大發條ゼンクに感應しない様な人は此の命令——探檢を必要とする仕事に對する命令——には従はうとしない。

勿論地上のあらゆる土地は今迄に誰れかに荒らされてしまつてゐるかも知れない。然し自分自身も又友も知らないその上又未だ且て詳細に地圖に著はされてゐない或る未開の地に於て人類その身を處すると言ふ事だけで充分であるかゝる事柄に對して同じく興味を抱く二三の友と私は常にその未開の地を求めて歩く。吾々は決して案内者を備はない。未知の地點に着いて二三日を吾々は搜索に費す。吾々は散々ちぢくになり、土地を探ね廻り、夜になつてからキヤム

プファイヤーの周りに集つて順次に吾々が見出した事柄を書きつける。

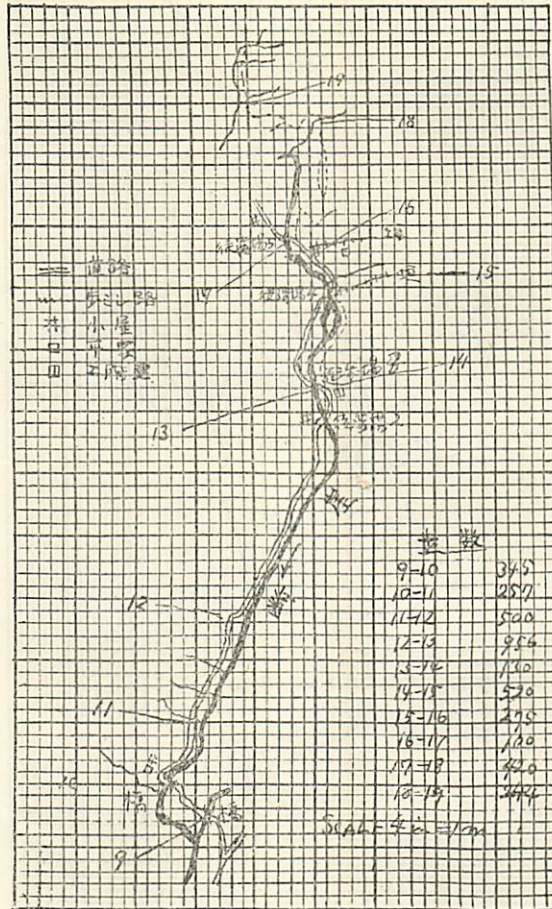
此様な言葉の報告は有益であるより以上に興味ある仕事であり、此の紙面に書かれた粗雑なスケッチもその内容が持てる以上の價値を吾々に教へるものである。此の路面スケッチを組合せて方何哩かの土地の實用的な地圖が出来上る。私は好んで最近數年間此の道の爲めに努力してゐる者である。

吾々は此の路面スケッチを作るのに澤山の日數と異常な努力を要する事だらうと考へてゐたが其れは誤であつた。磁石を讀み、方向を示す線を引き得るものは誰れでも緩歩の二十五パーセント以上も間違はずに實際上此の路面スケッチを作る事が出来る。それに對して必要な器具材料は

單にポケット用磁石・時計、鉛筆、ノートブック或は薄い板に綴られた數板の紙片さへあれば事は足りる。

例へば、私は此處に一對のスケッチを示して見る。此れ

私は昔一年餘り住んでゐた。普通の歩調で歩いて三十分と間違はずに此の土地のためにこの新しい地圖を作り上げた。最初に私は歩いた道の通りに停車場まで歩きながらスケッチして來た。次の日には馬に一度も邪魔されないうで道路や崖を圖示しながら且又眼で相互の距離を測りながら馬車に乗つて歸つて來た。



第一圖 或ル地點カラ次ノ或ル地點マデノ歩數ヲ數ヘテ距離ヲ測定セントスル方法ヲ示セル路面スケッチ圖

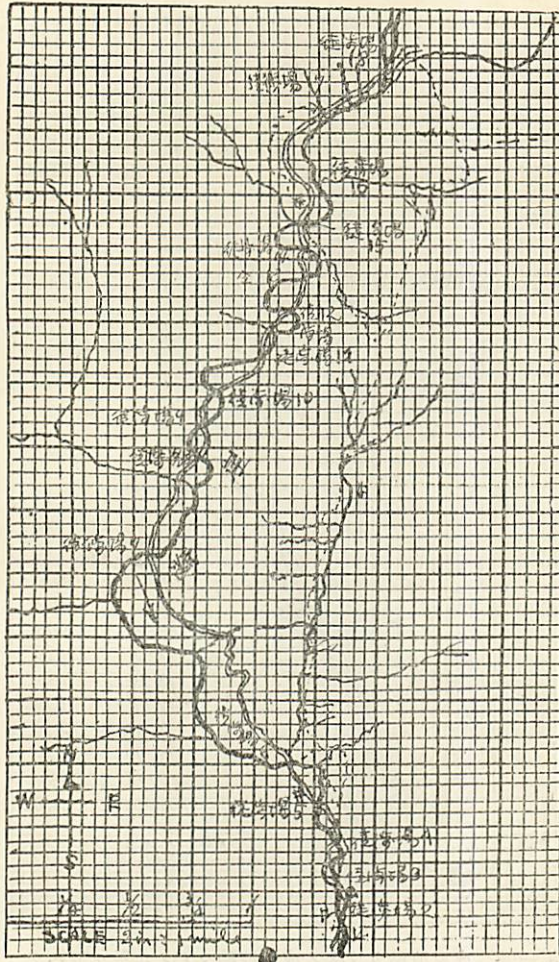
は夫々、馬車道を半分と残りは山の上を『斷崖の上にある最後の家』まで踏査せるものを示したものである。此處に

な紙の上に地圖として書き上げた。私の持てる磁石は一寸八分の一の指針面を有するものでこんな仕事をするのに

此の如くして粗雑なスケッチが懐中用の控手帖に作られた。第一圖にある様に道路、踏査せし道、崖、支流を單に線を以て表はしただけで、家に歸つて大き

少過ぎる。私はそれを腕時計の様に革のバンドで左の腕につけてゐた。そしてその磁石は途中では大抵要らなかつ

のない事ではあるが、こう云ふ風に持つてゐると磁石は露出だしその上直ぐに破壊し易いから今後こう云ふ風に持つ事を止めた。



第二圖 二枚ノ路面スケッチヲ組合セテ作りタルモノ

此の土地は起伏に富んでゐる上に樹木が非常に稠密に繁つてゐる事から考へて遠望がきかない。その上に私は分度器も定規も持合せなかつた。私は此處の地圖を持つてゐたが、それは非常に不完全なもので一二箇所すつかり訂正しなければ役に立たないものである。

若し、諸君が單に路

たが必要な時には何時も眼の下で正しい方向を指してゐた此の磁石をさしとして見るために一二秒の間四圍を看守ることが忽がせになる——これは左様につきつめて云ふ必要

筋を示してゆくだけなら實例に示した様な色々の局部的特徴を一々スケッチする必要はない。如何なる場合でも色々のものが交錯してゐるから細密に一枚の紙にすつかりお

さめ様とすると間違つて来る。現在の様に路筋が山路を通つてゐる様な場合には等高線も引かなかつたし峻しい坂も書き入れ様としなかつた。何故なら其處はすつかり歩いたのであるから其の代り別に私は或る地點から次の或る地點まで歩いた間の時間を書きつけた。(スケッチには書き入れてないが)此の事は極めて大切な事である。實際に歩いた時間は書き示された路面と共に合せて簡単に且充分其の路が緩いか如何か、又如何なる状態のものだかと言ふ事を適切に示してゐる。

スケッチの尺度

地圖を作るに當つて第一になすべき事は線を引くために或る一定の尺度を定めることである。第一圖に示す如く地圖上の四吋が實際の土地の上の一哩に當つてゐると云ふ意味で四吋を一哩とした。第二圖は一哩を二吋にとつた。(圖は便宜上其れを更に小さくせるものである)時としては尺度の單位として人の歩數或は馬の歩數を以て單位とした方がより便利な場合がある。孰れにしても用ひられた尺度は用紙の端に書き入れておかなければならない。そして圖上には眞の南北を示す線をも書き込まなければならぬ。

一步の距離

前進して行く時に距離は人の歩調の數を數へることによつて知り得る。人間の通常の一步行の距離は二十七吋から三十三吋までの間にあつて、人により又土地の状態で違つて来る。樵夫達は轉がる様にして歩くので一步の距離が大さい。慣れ切つた土地測量者の歩幅は三十吋で歩兵隊に於ける『急行歩調』と云ふのも同一である。強ひて自分の歩幅を測つたり、勝手な距離を測つたりしてはならない。

そんな事をすれば不自然なため疲れ易く且つ注意を授けて仕舞つて長い徒歩旅行に常態を保つてゆく事が出来なくなつて仕舞ふ。測量すべき距離を自然の儘の歩調で歩るきなさい。そして其處を往復して其の結果の平均をとりなさい。長い距離を歩く時にはさうしないと歩調に緩急が出来て来るからである。始めは先づ扁平な所からやつて御覽なさい。それから次第に所々に急坂のある所を——坂を上る時には歩調を大きく、下る時には小さくすると云ふ様に餘裕を持つ事を覚えなさい。

此の様な事をするのに慣れ切つた後では進行中の人間の歩調は市中を歩く時よりも大きいのが好ましい。私の場合

では平坦な道を歩くのに歩幅は約三十三吋あつて我が家の近邊を歩く時より三吋も大きい。定まつてしまつた緩歩の調子は一分間に百歩で、一哩を行くには千九百二十歩を要し起伏のある所なら二千歩かゝり、そして大体一時間に三哩の割合である。こう定まれば作圖の上に極めて便利である。何故なら、四吋が一哩の割合の尺度の作圖の際に方眼紙の一―十吋の平方の上には平均三二・六八吋の丁度百歩がそこにのせられるし又一哩が二吋の尺度の時にはそれが五十歩に當る。

應 用

出發に際しては進行中に見得る目的のために磁石を或る方向に向けておく。それから（右又は左の足だけどちらか一方を定めて）その歩数を數へながら進んでゆく。右も左も何れをも數へると云ふ事は不必要な許りでなく倦き倦きさせる。方向を示す二點間の距離が長い所では左右兩方を一つにした歩数の百歩毎に小石をポケットに入れる。豫めきめておいた目的地に着いた時には方向と距離を全体として考慮し了解するために出来るだけ詳しく記しておく。此の際諸君達が磁石や分度器を見ないで済ませる程に熟練す

るまでは四圍を見廻したり、方向を出發點に戻したりして補正してみる必要がある。

此の最初に止つた點を1として諸君のコースに基づいて目的地を書き入れた後に出發點から線を引く。そうして0から1までの歩数と同様にその間の距離とを用紙の端に書き印す。そして前方に再び他の或る地點を定めその方向を取つて同様の方法を進めてゆく。

時

未開地に於ては道路は一般にどこまでも悪い。若しそうでなければ全体として考慮された距離は、こんな單なる路面スケッチに於ては其處を踏破するに要する時間より少ない時間で征服してしまへるから距離の概算には間違ふかも知れない。然し時計だけでは信賴するに足りる。

大体の方向の補正を保つために歩幅を歩く必要のない曠野や平坦な眞直なコースの粗末な地圖を作るには時間の測定は充分正確になし得る。

眼に依る距離の測定

叢林、沼澤地、絶壁其他確かりと歩んでゆくことの出来ない所や、時間で距離を測り得ない所では唯一人で此の如

き測量に従事してゐる人は眼で測るより他に方法はない。然して熟練な人が如何にも熱心に實行して此の事を成就し得るかと言ふ事は餘りにも顯著な事である。銃獵家は概して眼で距離を測定するのが巧い。樵夫も矢張り上手であるアマチュア一のやつた森林又は山中或は又百碼以上はなれた水上での測定せし距離はめつたに信用は出来ない。

二人が一緒に旅行した時には相互に自分の豫測を主張する事が出来る。君の仲間を百歩先に歩かせて、畫家が風景をスケッチする時にする様に君の鉛筆を腕の方向に保ち友の見掛けの高さを鉛筆の尖から拇指の爪の尖までの間にとつてその點をナイフで印しなさい。それから又友を更に百歩さきに歩かせて其處で又測つてその高さを印しづける。然る時は此の二つの尺度は今後友の全体の高さが見える間は何處へ行つても此の尺度を用ひて測る事が出来る。

歩數計は良い道路や平坦で水平な土地では此の數へる面倒さを省いて呉れるが、起伏のある土地では使へない。それは頓着なしにそれが路であらうがなからうが毎歩の數を數へるからである。

動物の歩數

鞍をつけた動物の歩數は個々により大いに異なるが、然しそれは直に或種の試みにより定められる。その場合は緩歩の時と速歩の時と兩方やらねばならぬし又人が乗つてゐる時とゐない時の二通りをやらねばならない。馬の歩調は人と同様可成り一定したものである。驟馬の緩歩はより正確であり大股に歩く時は更に正確さを持つものである。

音による距離

山中の餘りにも大きな土地を地圖に表はすには歩數でやつても信用されないし又實行されそうもない。故に二人の人が一人は鐵砲かピストルを持ち一人がストツブウオツチを持つてゆくなら至極便利に仕事をすることが出来る。

例へば、諸君がキャムブの地點から或る峰までの距離が知りたいとする。その時に一人が鐵砲を持つてその峰に攀ぢ登りその地點に着いた時に彼れの仲間の注意を喚起するべく發砲する。それから彼は頸ハンカチをステツキに結びつけ平原の方に見える様に歩を延ばして此の即席に作つた旗を振つて合圖する。それと同時に再び發砲する。キャムブに居る者はストツブウオツチを持って合圖を見た時から鐵砲の音を聞くまでの時間を測る。音の速さは靜かな空氣の

下に於ては次の如きもので温度により左右される。

| 音の速度 | を要する秒数 |
|------|--------|
| 1030 | 5.13 |
| 1040 | 5.08 |
| 1050 | 5.03 |
| 1060 | 4.98 |
| 1070 | 4.93 |
| 1080 | 4.88 |
| 1092 | 4.83 |
| 1100 | 4.80 |
| 1110 | 4.78 |
| 1120 | 4.73 |
| 1130 | 4.68 |
| 1140 | 4.63 |
| 1150 | 4.59 |
| 1160 | 4.55 |
| 1170 | 4.51 |
| 1180 | 4.47 |

| 音の速度 | 温度 |
|------|-----|
| 1030 | —30 |
| 1040 | —20 |
| 1050 | —10 |
| 1060 | 0 |
| 1070 | 10 |
| 1080 | 20 |
| 1092 | 32 |
| 1100 | 40 |
| 1110 | 50 |
| 1120 | 60 |
| 1130 | 70 |
| 1140 | 80 |
| 1150 | 90 |
| 1160 | 100 |
| 1170 | 110 |
| 1180 | 120 |

大氣が無風の時には霧や雨は眼に着かない程しかその結果に影響しないが、風があるときには大なる影響を及ぼすものである。

距離が短かい所で行へば鐵砲の報告が鋭どく且高くきこえて表より非常に早くやつて来る。然し前に示せる表は粗末な路面スケッチを作るための極く大体のものである。

河上の距離

極くおだやかな流れを下つてゆく時に人は河の中流に船を保つことによつて巧みに距離を推測し得る。同様にしてある點から或る點までの時間をも測定し得るものである。

陸上目標(陸標)

私のスケッチは陸標を道路上にどんな具合に起せばよいかを示してゐる。人家を過ぎた荒野で人の住まない土地では私はキヤムプに使はれる地點、山峽、悪い叢林、崖等を同様の方法で示した。森や等高線の特性ある所には人間は其處此處に或る人工的な目標を設ける。又木が繁茂してゐる所へははいれないし、燒棒杭は取除かれるから叢に印をつけたり、石を推積したり其他狀況に應じて色々作りかへてゆく。

地圖の作り方

單なる路面スケッチは唯或る地點から次の或る地點への道筋を示すものであり又それは人がどんな風に旅行しても入用なものである事を知つてゐる。此れは數學的な正確さを要求しないし又粗末な器具で迅速に作る事が出来る。その上、方數哩の土地の有用な實際的の路面スケッチを適當に組合せて、一人で以て僅かの日數で作りに得るものである。

豫備練習の身体に及ぼす影響

中 村 新 一 郎

何れの運動競技を問はずその競技のシーズンより次のその競技のシーズンに到る間はその競技を休止しなければならぬのである。室内にて行ふある種の競技又は氣候等の關係により年中がその競技のシーズンなるものは例外であるが、然して競技の種類及地方（氣候等の關係）によりその休止期間の相當に長きに亘るものと然らざるものがある。

然して此の期間は競技者にとりシーズン中と略々同様にその競技の進歩發達に關して重要な期間である事は言を俟たぬ事である。之の期間をその競技のシーズンに對してシーズン外と名付ける。

競技者はシーズン中の温度のアルバイトに對し、之のシーズン外に於て心身に適當の休養を與へ又均一なる發達を

達せしむると同時に適度のトレーニング及節制により、シーズン中に得し体力及競技成績を次のシーズンまで持續せしむるか或は更に又適當の豫備練習により、より以上の体力及技術を習得しなければならぬのである。

何れの競技にせよ、そのシーズンに入りて直ちにその競技の練習に取掛るよりは、一定期間の豫備練習をなしたる後、その競技のシーズン來りて直ちに正式練習に取掛る方が遙かに効果ある事は勿論である。

之の豫備練習は競技の種目及びその過激度の如何等に依り異なるも、その競技に使用せられる身体諸部分を常に鍛鍊してその競技の運動を完全に遂行せしめ得る様にして置く事である。それ故豫備練習にあつては耐久力を得る事を主

眼とし競技の種類に依り過激度大なるものにあつては循環器官・呼吸器官及び消化器官等の内臓諸部分を強固にして置く事が必要である。

耐久力の大小は主に身体の内臓諸器官の健全と否とに依り影響せられるものにして特に過激なる長時間を要する運動競技にあつては循環器官及び消化器官の健全強固を必要とするのである。

運動競技に必要な耐久力（内臓諸器官の健全、競技に必要な諸筋肉及神経等）は多少はその人の天性に依る事もあると言ひ得るが、その競技者の絶えざる節制及トレーニングにより得られるもので一朝にしては得られる所のものではない。競技者はシーズン中及シーズン外、即ち日常常に飲食及睡眠等に留意し暴飲暴食は嚴重に之を避け、又競技の種類によりては食物の種類等に就ても相當に注意しなければならぬ。又競技者にとり飲酒の害は勿論云ふまでもなく喫烟も同様にして益あるものではない。之の外茶・コーヒー等刺激性の強き飲料物及食物は餘り多くを攝らぬに越した事はない。

又同時に睡眠は競技者の身体、精神に著しき影響を及ぼ

すもので心身の疲勞困憊は之の睡眠に依り回復せられる事も最も大にして、睡眠時間の多少は心身の疲勞回復に直接に影響する所のものである。即ち睡眠時間の過少は避くべき事であり同時に又その過大をも避くべきである。即ち睡眠時間は日々之を略々一定せしめ、規則正しき起床及就寢をなすべきである。

トレーニングに就ては前にも記せる如く各種の競技により異なるも、要するに、その競技に必要な身体諸部分を健康に且強靱ならしめる事である。運動競技を志すものに、その競技のシーズン外に節制及びトレーニング等の事柄に就いて、案外等閑に附して居るものがあるがシーズン中は勿論シーズン外に於ても細心の注意を拂ひ、志す運動競技の進歩向上に就いて留意し一方体力及び運動精神の増進、涵養に努めなければならぬ。

何れの競技にせよその結果の良否は種々なるファクターにより支配せられるものにして之の中特に重大なるものは競技者の身体のコンディションである。

競技者の身体のコンディションの良否は競技の成績に影響する所甚大なるものにして、殊に体力を要する競技及び

その運動競技のデリケートなるものに於ては特に之の身体
のコンディションの如何によりその競技成績の大半は左右
せられるのである。

競技者の身体のコンディションは常に一定なるべきもの
ではない。その良否は略々一定の周期的關係を有するもの
で、コンディションの最良の時と次に來るべき最良の時と
の間には相當の時間があるものであつて、又コンディショ
ンの最良の時と最悪の時との間には相當の差があるもので
ある。然して之の身体のコンディションの差は競技者の節
制及トレーニングその他により相當に僅少ならしめる事を
得るものである。即ち身体のコンディションを固定的に表
はす時は、相當に上下のあるものとなるものであるが、節
制及トレーニング等によりては上下の差の比較的少なるも
の即ち略々直線的のものたらしむる事を得るのである。又
競技期日等の豫め決定したるものにあつては競技者自身の
注意により或る程度までその期日當日の身体のコンディシ
ョンを最良ならしめ得るものである。

次に極めて不正密なるものであるが参考までに筆者の經
験せしトレーニングの中の身体のコンディションを圖示的

Fig. I

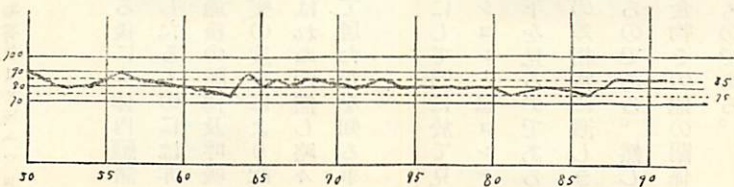
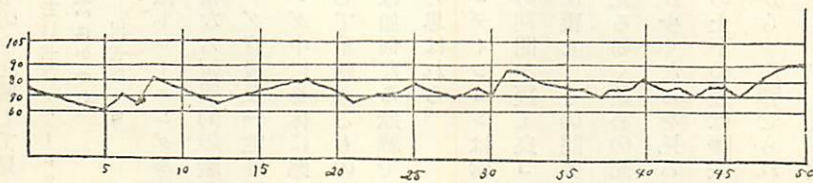
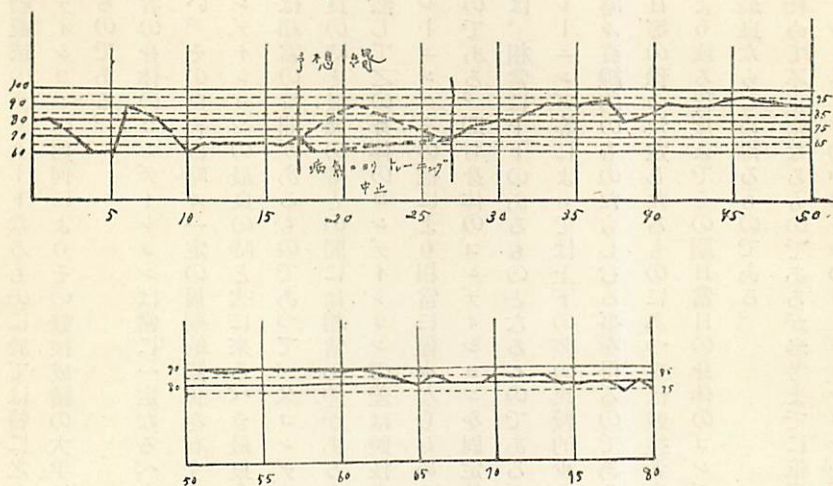


Fig. II



に表はせるものを記載して見る。

Fig. I 昭和二年のトレーニング中の身体のコンディションを
表はせるもの

Fig. II " 三年の "

上記の圖はトレーニングを終りたる後に身体内臓諸器官に就いて正密なる醫學的の驗査をなしたるものには非れどもトレーニング直後及一定時間の經過後の脈搏及呼吸その他トレーニング中に身体に感ずる苦樂の度合により記したるもので決して正確なるものとは云はれぬが然し略々コンディションは如何なる状態で上下して居たかを知る事が出来るものと思はれる。

身体のコンディションは常に不同にして圖に於て見る如く略々一定の期間を経て良コンディションと悪コンディションの間を反覆し、その間多少の上下を見るのである。即ち圖に於て見る如く始めの間は上下の差相當に激しきも次第にその差が少くなるを見る事を得るのである。然して前記の如く之の上下の差は睡眠又は飲食物その他の關係にも依つて少なからず影響せられて居るものである。

次にトレーニングと脈搏數との關係に就いて考へて見る

如何なる運動競技にせよその競技が多少過激なるものにあつてはその競技の休止期間何等のトレーニングなしに、直ちにその競技の練習に取掛る時は非常に早く疲労を覚え又その疲労を回復するに相當の時間を要するものである。勿論之の他身体諸部分の筋肉に痛みを感ずると云ふ様な事もある。然るに一方シーズン外に絶えずトレーニングをなせる時は、その競技のシーズン來つて直ちにその正式練習に取掛るもトレーニングなしに正式練習に取掛るものよりは遙かに樂にして且疲労及諸筋肉の痛みを感ずると云ふ様な事は比較的僅少にして、又疲労回復に要する時間等も遙かに前者に比して短少である。

例へばトレーニングなしに或一定のアルバイトをなし次に同一人がある期間の間絶えずトレーニングをなして前と同様なアルバイトをなすとすると此際兩者のアルバイト直後の脈搏数が平靜の脈搏數に復するに要する時間を比較する時は後者は前者に比してその短少なる事を知るのである。七十五號に於て岡村源太郎氏が「登山家の馴化に對する一考察」と題して記載せられた如く、即ち一定のトレーニングを絶へず行ふ時は循環器關はその競技(アルバイト)

に馴化せられトレーニングをなさざる者に比し、より平靜の状態を以て一定のアルバイトをなし得られ又より早く平常の状態に復し得られる様になるのである。

極めて簡單なるものではあるが筆者のトレーニング後に於ける脈搏數に關する記録を記載して見ん。

圖面參照

Fig. 1 田宮川幸三氏による「トレーニング後の脈搏數」
Fig. 2 田宮川幸三氏による「トレーニング後の脈搏數」

但し脈搏數は30秒間のものを記載す

圖に於ける上部の線はトレーニング休止直後の二十秒間の脈搏數にして下部の線は休止三分後の二十秒間の脈搏數で最下段に記入せる數字は三分間に減する脈搏數(但し二十秒間のもの)である。Fig. 1 及び Fig. 2 は共に同一場所にてなせるアルバイト(約一・二五軒の三―四度の傾斜地に於けるランニング)にして日々の身体のコンディション及所要時間の如何により脈搏數は異なるも三分間に減する數を見るに、Fig. 1 に於ては平均二十秒間に十二(一分間に三十六)に於ては平均二十秒間に十七(一分間に五十一)の減少を見るのである。即ち約一ヶ年のトレーニングをな

せる後には以上の如き關係に到つたのであつて、之をその
 前年（昭和元年）に比する時は

| 所要時間 | 脈 搏 數 | | 三分間に減ずる量 |
|------------|-----------------|------------------|----------|
| | 直後 (20秒間のもの) | 三分後 (20秒間のもの) | |
| 1926 6'30" | 41. | 31. | 10. |
| 1927 6'27" | 44. | 32. | 12. |
| 1928 6'01" | 51. | 34. | 17. |

此處に記せし数字は何れも約十五—二十回のを平均
 せるものを用ひて居るのである。

即ちトレーニング直後の脈搏數は要せし時間の大小又は
 コンディション等により上記の如き差異があるが然し約三
 ケ年のトレーニングの結果最初アルバイト直後より三分間
 に減ずる脈搏數三十が約三年後には五十一に達したのであ
 る。

次に参考までに昨年までに得しトレーニング後の脈搏數
 に関する記録を記して見ると、

| I 距離 | タイム | 脈 搏 數 | |
|----------|--------|-----------|------------|
| | | 直後20秒間のもの | 三分後20秒間のもの |
| 3200m(a) | 14'20" | 40 | 28 |
| 1600 (a) | 6'18" | 43 | 31 |

Fig. I

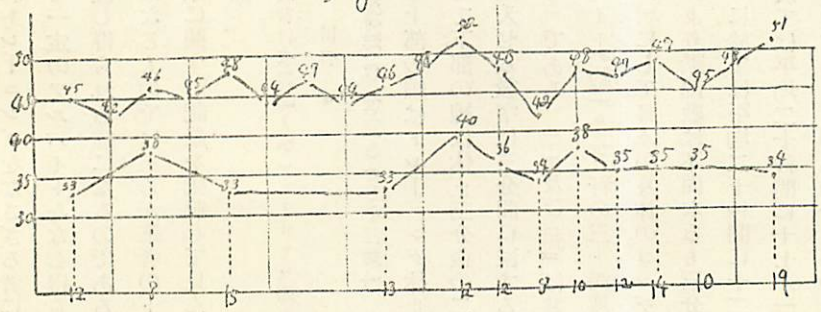
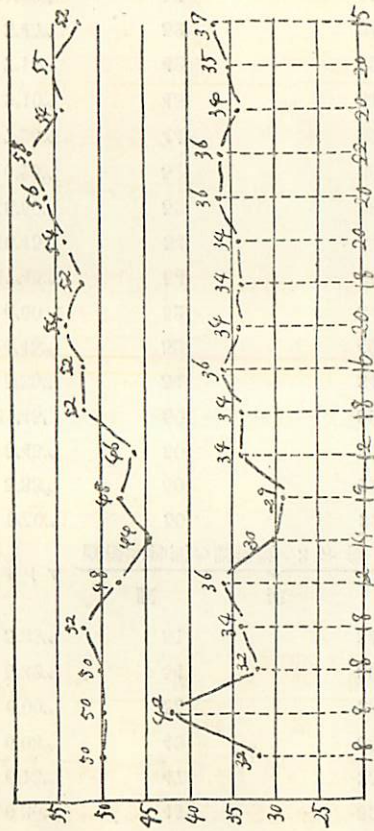


Fig. 1



| | | | |
|--|--------|----|----|
| 1000 (a) | 5'35" | 45 | 33 |
| 1250 (b) | 6'40" | 43 | 33 |
| 1250m(b) | 6'26" | 42 | |
| 1250 (b) | 6'35" | 45 | 38 |
| 2 ³ / ₄ km (b-c) | 21'45" | 55 | 45 |
| 10km(b-c發時) | 58'00" | 48 | |
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 5'41" | 48 | 33 |
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'01" | 44 | 32 |
| 2km (b) | 12'50" | 46 | 33 |
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'57" | 47 | 35 |
| 10km(b-c發時) | 57'40" | 50 | 35 |
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'48" | 44 | 33 |
| 1 ¹ / ₂ km(c) | 8'00" | 40 | |
| 1km(a) | 8'26" | 48 | 35 |
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'30" | 46 | 33 |
| 1 ¹ / ₂ km(c) | 12'50" | 55 | 41 |
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'25" | 48 | 35 |
| 1 ¹ / ₂ km(d) | 5'50" | 52 | 41 |
| " | 5'45" | 53 | 40 |
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'15" | 53 | 40 |
| " | 6'10" | 48 | 36 |
| " | 6'00" | 42 | 34 |
| " | 5'56" | 48 | 38 |
| 1km(a) | 6'08" | 40 | 30 |

| | | | | | | | |
|-------------------------------------|-------|----|----|---|--------------------------|----|----|
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'30" | 45 | 33 | 10km(b-c-d) | 1 st (15'20") | 44 | 32 |
| " | 6'13" | 47 | 35 | 1km(b) | 6'50" | 52 | 34 |
| " | 6'03" | 49 | 35 | 2km(a) | 10'00 | 48 | 32 |
| 1/2km(d) | 6'00" | 55 | 38 | 1700m(b) | 9'45" | 54 | 34 |
| 1km(c) | 5'32" | 54 | 39 | 1km(d) | 7'10" | 56 | 34 |
| 1 ¹ / ₄ km(b) | 5'35" | 51 | 34 | 2.7km-(d-b) | 16'10" | 50 | 34 |
| | | | | 1.7km(b) | 9'48" | 56 | 56 |
| | | | | 1km(d) | 8'00 | 50 | 36 |
| | | | | 1.7km(b) | 9'48" | 58 | 36 |
| | | | | 1.3km(c) | 9'30" | 50 | 36 |
| | | | | 3 ¹ / ₄ km(b-c) | 21'00 | 54 | |
| | | | | 10km(b-c-d) | 63'55" | 45 | 30 |
| | | | | 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'18" | 48 | 32 |
| | | | | " | 6'00 | 44 | 28 |
| | | | | 1.7km(b) | 9'15" | 54 | 34 |
| | | | | 3 ¹ / ₄ km(b-c) | 18'00 | 64 | 39 |
| | | | | 10km(b-c-d) | 55'50" | 42 | 28 |
| | | | | 1.7km(b) | 10'30" | 55 | 35 |
| | | | | 2 ³ / ₄ km(b-c-d) | 24'00 | 53 | 41 |
| | | | | 1 ¹ / ₄ km | 6'18" | 48 | 29 |
| | | | | " | 6'30" | 46 | 34 |
| | | | | 2 ³ / ₄ km(b-c-d) | 21'30" | 51 | 34 |
| | | | | 2 ³ / ₄ km(b-c-d) | 2'45" | 52 | 37 |
| | | | | 1 ¹ / ₄ km(b) | 6'30" | 不明 | |

II 距離 タイム 脈 搏 數
 直後20秒間の脈搏數 3分後の脈搏數

但し a; 平地地

b; 3°乃至4°の傾斜面

c; 5°乃至5°の傾斜面

d; 8°乃至15°の傾斜面

+ [b-c-d]; 3°乃至15°の登高

- [d-c-b]; 3°乃至15°の降下

前記の數字はシーズン外に行へるトレーニング中の或る一部のものに就いて記したもので全く不精密なるものではあるが唯トレーニングと脈搏數とに關してその概略的のものを記したに過ぎないのである。然し概略的ではあるがトレーニングが脈搏數の増減に少なからず影響するものなる事を知る事を得るのである。

トレーニング及節制は前述の如く身体のコンデイションに關係する所極めて大なるもので従つてトレーニングにより身体の諸部分は所謂馴化せられ、鍛鍊せられるものである。

勿論その結果は短日月一朝一夕にしては得られる所のものではないのである。即ち如何なる運動競技にせよ先づその身体をしてその競技を行ふに充分なる様にせしめるのである。即ちその競技を行ふに必要な充分なる体力、身体諸器

關及びその他を作り上げて行くのである。之は一にその人の絶えざる努力、節制及トレーニングによるものでなければならぬ。

豫備練習の身体に及ぼす影響の如きは實に微細なるものにして、到底前記の如き散漫なる事柄で満足し得る所のものでないのであつて、かくの如き事は益々研究の余地ある事であると共に、すべき事であるのである。

以上の如き冗文は一重に讀者諸賢の御寛容を乞ふ次第である。

(一九二八、七、三〇)

スキーへの憧れ

う ゑ か つ 生

大正十四年（一九二五）一月廿五日の午後の事である。

山間の落西に蟄居して何所の高校へとのあてもなくあたたらしくかるべき若き日を學問にしばらく親しい友と二人で勉強の眞似事をして居た。豆粒の様になつた火を圍んで漫談に耽り乍らサンデー毎日をめくつて居たら突然友は「おいお前北海道の農大に行かない？」と丁度其の時私は東孝太郎氏が初歩のスキー愛好者の爲に草されたとある「スキーを享樂する人の爲めに」の頁に見入つて居た。恥しい事ではあるが我が北大のスキー部が生れたのが明治四十五年であり乍らこのスキーの字を目にしたのはこれが初めてであつた。北海道と聞いて私の頭にピンと來たのは勿論雪であるが、又廣い牧場と馬であつた。春には馬、冬にはスキ

ー、雪「うん、そうだなあ！良し北大に定めた」と餘の事は何んにも考へず只スキーと馬に魅せられて願書を出してしまつた。それがそも／＼のやみつきでその東氏の色々書かれた所々に赤インクで線を引つぱりながら一氣に讀んでしまつた。それにはスキーの起源、種類、服裝、選擇法などが書かれてあつた。

運良く其の年に入學出來て一人として知人のない所へ無鐵砲に荷物を送り込んでやつて來た。車中ではいくらかの不安はあつたがそれも馬とスキーを考へる事に依つて拂ひ去られて、所々に見える溶け残つた谷間の雪に心をおどらせ乍らとう／＼落着く札幌へやつて來た。さて馬に乗りうと思つたがどうもおつかない、馬の年に生れた自分であり

乍ら馬かこはいとはさて不思議、只一度鞍につかまつて尻をすりむいた丈で止めてしまつた。それからと云ふものいちづにスキーをこがれにこがれた。寮のストームに無理やりに使はれてひゞのいつたスキーの負傷者を見ては酒の酔ひも醒め、あれが東洋一の北大のシルバーシャイツエだと聞いては目を丸くした。

私の生れは紀州の熊野である、全々その木、其の色を異にした札幌の木々は心を引くに充分ではあつたが、それよりも未だ見ぬ雪の原がより大きな力があつた。とう／＼やつて來た。たしか大正十四年十一月十二、三日だつたと思ふ、初雪!!木の葉落ちて濕り勝ちな陰氣さに押しつぶされる様な感じを起して居た所へだ。我等より一年先きにスキーの味を覺へた雖達は足のない私等卵子にいかにも自分で取つて食べる食物はまた格別だと云はぬ許りに林學講堂前のローンの千刃の谷(少くとも私にはそう見へた)底へ滑り込んでしまふ。残念だつた、早く滑べつて見度い、まだ自分のスキとして持たないあはれさ、指を銜へて眞白になり寒さの爲に足の痛むのを忘れてほんやり否寒さと滑べりたさとに震へ乍ら見てゐた。其所へ同窓の先輩が汁だく／＼

になつて「おい!はいて見ないか」と親切にかして呉れた。そして色々滑べり方を教へて呉れた。それよりも先づスキーのはき方も知らなかつたのだ。直滑降から……眞直に滑れ、こう云ふ具合に一才膝を曲けて後前足に六分四分か七分三分位に体重をかけてね、前に轉ぶ位ぢやなくては上手になれつこはない、と、云はれる通りに姿勢を取つた。

丸で針金の様だ、(これは後になつて誰かれの批評)滑べつた、頭が先きに地に落ちた様、痛いッ、其れも其の筈二寸位より積つてやしないのだから、僅か三、四間滑べる中に轉んだも轉んだ五回、少し坂になつた所で坂を下に見下して立たうとするからいくらしたつて立てやしない。轉ぶ毎にひやつとする。登れない、スキーが邪魔になつて仕方がない、五、六回やつた、汗と水で身体中がビシヤム／＼だ前に轉べた、しこたま鼻の尖端を土でたゞきのめしたが嬉れしかつた。俺は上手になれるぞ!と瘦我慢でもなんでもない本當にそんな氣がして嬉しかつたのだ。それから試験が近づいた。スキー取次及び青山温泉合宿募集の掲示が出た。だがスキー取次では雪が目の前にもらつてゐるのに取次などでは遅すぎる、まだるつこい。

其所で東孝太郎氏の選擇法を行季の底からひつぱり出して讀んだ、取次まで待つて居れば割引して買へるものを早く自分のを欲しくて買つて來た。試験中にも降つた、月夜の晩、夜二時頃までも面白さに夢中になり試験など忘れてやつた事もある、勿論明るる日の試験はベチャンコだ。

合宿の打合せ會が私達の試験の終つた日、十二月廿日に開かれた。いかめしい岡村さんが主任だつた。とてもやさしい温い人だつたのに、あの時は私にそう見へた。廣田さん、小川さん、伴さん達の多くの先輩が皆神様の様に見へた。色々と合宿中の注意を受け、スキー部の教程を貰つた。其の晩、あつちこつちと讀んだが一寸とも分らない、合宿で教へてもらひ乍ら讀まふとリュックサツクのタンゼンの中に包み込み濡れない様にして大事にしまひ込んだ。愈々スキーする事を毎日の仕事の様に初めた。十三班もある百六十名餘り、各班毎に班長が居る、實に整然たるものである。

第一日はさしたる天候の害もなく、スロープも奇麗だつた。只横なぎにあたるアラレに顔をしかめ乍らも、前にのめり、後に轉び、七轉八倒とし乍ら下まで行くのが無上の

喜び、第一班、二班の鳥の様に速く雪煙を巻き起し乍ら滑べつて行くのを見ては癪にさはつた、第一日は終つた、第一夜の温泉と漫談は今なほ忘れられない、其の晩は少し天候險惡、山の中の吹雪はものすごい。

第二日案外早く晴れ上つた、氣持ち良い朝の空氣に自分の熱を奪ひ去られるのも惡いものではない。雪は自分の丈よりも高く、六尺以上も積つてる、ストツクの跡に残るその穴は朝日にもなされて實に見た事のない様な色をして居る。

向ふを見ればニセコアンヌブリの麗姿、途中喜びながらスロープに近づいた、見れば前に出掛けた連中は一人として下まで下りて來ない、皆途中で雪に埋り眞白になつて居る。オヤ！變だぞ、班長あれは何班ですかと聞けば初班ではない。驚いたなあ昨日、あんなに皆うまく滑つて居たのにと思ひ乍ら行つて見ればどうでせう、スロープの下から上まで將に波が折れんとした様な恰好である。太平洋の波を乗り越すにはさまで苦心はいらないが、雪の波はこりや大變一つ越せば二つ目ではきつと頭を雪に突きこむ、これぢや滑べるより轉んで下りた距離の方が長い、とう／＼午前中



Blick ins Oberengadin

Blick ins Oberengadin

は一本も完全に下まで下りられず終ひだ。冷たい握り飯二つと鹽ビキ一切れに力を得て、スロープの上まで登つた、見れば滑れ相にもない、波の上にオカマの跡、班長は模範を示して呉れた。丸で漣波に浮ぶ竹の葉の様だ「下りて来い」「滑れつ」とドナツてる。下りて行かぬ理由にもゆかんだんぐ滑つて行つた、だが誰れも轉ばずに下りるものとしてない。三回で行くのが關の山だ、とうく僕の番が来た上、下、左、右、左斜、右斜にと心持良い所ではない地獄へ落ちる夢心地だ、だが幸にしてか不幸にしてか、下まで轉ばずに行けた。班長の「こひ」さんは飛びあがつて喜んで呉れた。他の班長に鼻を高くして居る。僕は何んにも分らない。たゞ最後にドターンと地べたに叩きつけられたのだけは覺へてる、外の人が笑つてるので僕も笑つた、なんだか急に嬉れしくなつちやつた、汗をだぐぐにしながら登る時、なんだか目がしらが熱くなるのを覺へた、此所でまた「前に轉ばなければ上手になれないぞ」の言葉が頭にピン。

すべてのスキー技術の基礎になると云はれる直滑降の練習が四日間續いた、そしてボーゲンの基となる半制動、全

制動へと技術は進む、最後の日、何んと幸福な事である事よ、恐ろしくもありまた愉快だろうと思はれる山へ、しかもそれはスキー登山に一番良いニコアンヌブリ、だが中腹だけより登らして呉れなかつた。白樺の林の美しい事、それを所々に残して廣がる大きな、長いスロープの雄大さ。其所でもまた私達は恐ろしさをこらへてボーゲンを教へられた。大きなスロープを下に見た時の恐しさ、その恐しさの爲に全制動もくそもあつたものではない、ふんぞりかへつて尻もちつのが仕事だつた。

其所へ頂上を極めた山班の連中が氣持良さそうにボーゲン、スラローム、直滑降にその登りの苦痛を忘れた様に愉快相に下りて来た。あゝ彼等の美しさよ、俺は何時になつたらあんなに下りる事が出来るのだらうか、とうく山を下らねばならない時刻とはなつた、何んにも分らない、只もう前を見る許り、小枝に顔を拂はれる事など何んとも思ひはしなかつた、所々にかすり傷がある。

かくして私の初めての合宿が終つた。どうやら眞直に滑べる事だけにはなれた。この合宿中で私はそのスピードその愉快さよりもつと異様なものを見た。それはジャムブ

である。スキーと云へば只スベルだけだと思つて居たのに初めて見たそのジャムプは私を轉倒さす許りに驚かした。良くまあ空中に出た時氣を失なはないものだと思議でならなかつた、着陸とた時は本當に大きな音を立てる、軟かい雪だのに變にバーンと云ふ様な音を立てるから私はこつそりそのシャンツエの所まで行つて着陸斜面を見た、固くふみしめて轉べばいたい様である、何故軟かにして置かないのだらうと此所にもまた疑問を抱いた。

かくて第一回目の合宿が私に與へたものは只眞直ぐに滑べると云ふだけで他になんにも教へて呉れなかつた。然し其のスキーの技術的な方面でよく精神的に温い氣持の良い何んと云つて良いかこう一寸分らない氣分を私の心の奥底に植ゑつけて呉れたのはこの第一回目の合宿である。最も私の今までもの心がついてから記憶して居るものゝ中で一番幸福に感じせしめたものだ、そしてまたこれから生活を通じて一番に楽しい一番有難いものであらう。

この合宿がうれしかつたが爲に、そしてまた高等技術を習い度いが爲に私は春の合宿にも加はつたのである、だがその春の合宿までの間の事を少し書こう。

札幌に歸へればもう明る日は卅日である。正月元旦も間近だ、幼き折自分の命のそだれけぢままるのも知らずに喜んで正月、そんな命など考へるよりも早く大人になり度い。大きくなり度いと云ふ氣持の方が大きくて喜んで迎へられて居た正月もスキーに一度味を覺えたものには暮れてもスキー明けてもスキーで正月なんぞ眼中にない筈、合宿中に強く禁じられて居たアルコール、元旦の屠蘇に頬を少しほでらし乍ら一早く三角山へと走つた。だがそれは誤りだつた、少し覺えかけ、ものにかけて居たクリスチャニア(生意氣に此所で使はして貰ふ事にする)はベシヤンコだ、なるほどね……良く分りましたと一人でうなづき乍らその日は早く歸へつて來た。元旦である、怪我でもしたら大變だとスキーをやり出してからこの時はじめてこんな事を考へたものだ、そして明日はスキー部の手稻山初登りと掲示が出て居る、實を云ふとその時くたばつて同寮のものに負けを取つては残念だからであつたのだ、そして夜は早くからスキーにバラフィンを纏でたんねんに塗り明日の下りを十分味ひ度ひと考へて居た、だがその注意も下りの痛快味所かすつかり仇となつて上りの後すべりと、下りの恐

ろしき、思はぬスピードで木を前にしてふんぞりかへるな
ど私の身体は綿の様になつてしまつた。滑べるのみを考へ
て上りを考へない馬鹿者はこんな目に合ふのであらう。今
になつて考へれば自分乍ら小氣味良い程である。初めて登
る手稻の山。樹氷咲く清淨の地。それはスキーでなくては
とても得られない、味はれない美しい景色だ。歌に讀む美
しい詩をまざくと眼のあたり見る事を得た私は夢心地で
あつた、將にあの世の世界でもあるかの様に、ほんやり
二、三度立ち止まつて後のものからどなられた事がある。
それ程南國の私の胸に大きな波を荒ら立たせたのであつた
かくして最初の山登りに成功した私はもう畑の小さなスロ
ープでは満足出來ず日没までに時の少くない放課後や、新
しい雪の降つた時以外は何時も友を誘つては人の居ない山
へ出掛けた、只一つより知らない手稻の山へ、バラダイス
大曲りの直滑降は第一年目の唯一の友であつた、そしても
う一つ奥手稻山、手稻山と少し趣きを異にした山だ、其所
にはまた今まで見た事のない怪物を見た、まばらに生へた
美しいタンネンは頭から白綿をかぶつて、万人よりほめた
へられる森の美人白樺よりはるかに美しく姿を見せ

て呉れた、其の綠色と白い雪。

一月、二月は夢の様(一)に山で遊んだ、そしてその到る所森
の中ではスキーヤーに喜ばれる粉雪だ、そのやはらかさは
一度その肌(二)に觸れればその味は忘れられない、處女のそれ
の様かも知れない。

三月の試験がすんで合宿に向つた、だが冬の折に比べて
その人数のあまりに少き事よ、あまりの少なさに私はがつ
かりした。一緒になつて見れば皆上手な人ばかりである。
はづかしさ……この人達に教へて貰ふにしても一緒にやる

のかと思ふと尻みせざるを得なかつた、何故なら教へて
貰ふにあまりにもその技術がかけはなれて居たから

班長は伴さんである、最初の晩、明日から練習を初める
と云つて私達二、三人の初めてのものにドテラを着て先づ
アブローチの姿から教へて貰つた。人のは見て居るものゝ
何んな具合に体重をかけて行くのかさっぱり分らなかつた
この体重のかけ具合がジャムブに一番大切なサツツに大き
な影響を及ぼすのであるから先づこのアブローチの姿勢さ
へ完全に出來兩足に平均の体重が乗せられたらそれで良い
とうちくつろいだドテラ姿で見せて貰つた時はなんだか其

の恰好が着物に禍ひされて随分妙な姿に見へたが笑ふ所のさはぎではない明日から自分も生死の境と思はれるジャムブをやるのだと思ふとゾクツとせざるを得なかつた。色々外にむづかしい講釋もあつたがそれは今此所で云ふ必要もない。

今まで山スキー許り履いて居た爲に巾の廣い、長い、随分重いスキーをはいての直滑降をした時丸で傳馬船から蒸汽船か軍艦にでも乗つた様な感じのする安定さとスピードそのスピードに伴ふ氣持よさとを味ひ得た、これから俺も飛べれるだらうといくらか安心の程を高めたがさてやつて見ると其の恐しさつたら……距離は初めての者としては長すぎたが(十二、二采)そのシャンツエの高さは實に低いもので僅か一米もあるかなしの飛臺である、それがどうでせう丸で斷崖の様に感じられる。飛び出してしまへば後は何んにも分らない、ドスンと雪に頭か尻をぶつ打けて初めて自分の正氣にかへると云ふ始末……万歳ジャムブと誰かと批評して呉れた、胸をはり、腹をつき出してそりかへつたその姿勢は正しく万歳をする時の恰好であつたでせう、春のザラメ雪だ、手をつき込めば至る所から血がにじみ出る顔

をぶつつけてはあつちの頬を猫にかゝれた様に節ばつて皮をむき、こつちの頬をまるつきり皮をむいてしまふ、それは、本當にみぢめなものだつた、氣持ち良く立つて滑べつて行く人を見てはいくらあの人達が何年もやつてるにしても何故俺には一本も立てないのであらう、すべての事に例外と云ふもの、偶然と云ふものが必ずある。それなのに俺には、このジャムブにはそれがいいのか知らんとあまりのなさけなさにものが云へなかつた。それはシャンツエが大きすぎたのかも知れない、それとも全く俺には出来ない藝かも知れないとも考へられた。然しもう一つ外に五米位の臺を作つて貰つてその合宿中たつた一度下まで行けた事がある、これがその偶然な例外であつた。その時の私の喜び……若しこの偶然がなかつたなら私はもうジャムブはやらなかつたでせう。春の合宿は本當に轉びに行つた様なものだつた、そこで私は考へた、こりや俺にはスキーの筋肉がまだ發達して居ないのだ、否全々なのだ、ジャムブをやるにはまだ早い。

かくて第一年目のシーズンが完全にすんでしまつた。そして初めてのもの誰れでもがする様にわざ／＼重い不恰好

なスキー靴をはいて意氣揚々と内地へさして……スキーをやつたと云ふ事に非常な得意さをもつて友などを随分うらやませたものだ。思ひ出せば冷汗が出る様な事まで向ふが知らないと思つて大きな法螺も吹いて居た、やつと一週間前にこうだあゝだと自分がコーチして貰つたそのまゝを……自分がいくらやらうとしたとて出来やしない事を……いかにも自分がやつて居る様な風に話した、そんな法螺も友人たちは私の雪やけた顔ですつかり本當にしてしまひ何んの疑ひも起さなかつたらしい、一寸小氣味が良かった。そして暖かい熊野に歸へつて何だつたかあの重い靴を得意になつてはき、三里か四里程の道を歩いた事がある。靴下を三枚も四枚もはかないと足が中で遊ぶので具合が悪るいから暑いのも我慢して歩いた。雪の上ではそうまで重いと歩るきにくいとも感じなかつたのかたい道を歩るいと本當にへこたれてしまつた、足はむせる様だし、向脛かか文の筋肉が延びしまつてる様に感じられた。

丁度此の年私は適合であつた、四月の下旬に(多分廿六日だつたと思ふ)検査を終へて急ぎ札幌に向はんとして大阪の梅田に居た、船の具合やなにかで都合の悪い時間(朝五

時半)に大阪の築港に上つて直に梅田に來たのだつた。朝九時の特急を待ち乍らそこらをぶら／＼して居た所が八時半頃だつたと思ふ、あの邊で見なれない帽子を被り朝早くから何時間もうろ／＼して居たので妙にウサンくさい奴がじろ／＼見て居る、變な奴だと思つてる中に都合悪るく私は女の人の所へこれから札幌へ眞直に歸へる、御氣嫌様と封筒の上書を廊下の窓の所で書いて封をしようとした時やにはに後からその手紙を引つたくる奴がある、何に奴と後を見れば一寸交番まで來い、となんだか黒い表紙の手帳をさし示してさつさと行つてしまいやがる。おのれ此奴不屈きな奴と後を追つかけてその手紙を取りもどした。丸でその手紙がチリ紙の様にクシャ／＼になつてしまつた。あの人の多い梅田驛の前を二人が(私は眞赤になつてほえ乍ら)喧嘩をしながら……人々は何事ときつと見て居た事と思ふ。後から考へれば恥しくなる……電車道の南側の電信柱にもたれて早速彼奴手紙を読み初め様とする、私は憤慨した。破れたつて良い、その手紙を分取つて「おい君は何物だ、はつきり名のれ」と食つてかゝつたらそやつまた黒い手帳を見せる。そして急でまたポケットに入れてしまふ

から何んの事だかさっぱり分らない（私は今までそんな手帳などを見た事もなく、刑事等が持つてるとは聞いて居たがわざと知らん顔をして頁をめくらし中をのぞいてやつた。これは意地だがあの場合そんな事を考へる暇はなかつた）それから學校の事や検査、特急で行くキツプを見せてやつた。其所にまた面白い事がある、身分證明書を見せてやつた時、去年の七月に貰つてるので彼奴これや去年の奴ぢやないかと云ふ。この時と許り私はこのへボクチャ私服奴、身分證明書は滿一ヶ年有効なんだ、期限が終らないと新しいのを呉れないのだと大いに意張つてとう／＼頭を下へさしてやつたのには痛快だつた。だが馬鹿を見たのはとう／＼手紙を讀んでやつた事だ。彼奴に讀ますのも癪だから俺が讀んでやらうと讀まされてしまつた。私にはどうも合點が行かない。不思議に思ひながら連れ先の所にやつて來ると丁度私が引つぱられて居る間に彼もやられたと見えてその理由を聞いて初めて分つたのだが其の日は公園停車場等人の多く集まり相びきするに良い様な所へ私服が多勢出張して居たらしい。不良青少年狩りデーとでも云ふのでせうか、全く僕の場合は驚かされた。

それも雪やけたその顔が猿の様だつたし、おまけにもつとも好都合に思はれる女への手紙……それも私のスキーへの憧れから災ひしたどうしても忘れられない話の一つである。

札幌に歸へつて來た。新しい人達が丁度僕達がやつた様に非常にスキーに憧れ、雪やけた顔を見ては驚いてる。

また得意の法螺が初まる。出來ない下手なものに限つてえらそうに云ひ、いかにも上手そうに云ふ世の習ひ。やれクリスマスチャニアだの、テレマークだの、ジャムビンゲターンだのと自分の只名ばかり知つてゐるのを室の中で下手な恰好をして見せた事を覺へてる。今でも冷汗が出そうだ。

第二年度のシーズンには味をしめた山のスキーに全シーズンを送つてしまつた。そして所謂ストツプと稱するものをまがりなりにも出來る様になつた時の私の喜び、手稲山第二の嶺の東の方にあるネオツ原でクリスマスチャニアにて完全に止り得た時は自信を持つ事が出來た。この年の春も青山に行き其所らの山は大概登り盡した。一月、二月の粉雪に比ぶるに春のザラメ雪もまた格別の味がある。

三年目がやつて來た練習に練習を重ねてやつとシーズン

の終り方になつてスラロームなるものが出来る様になつた
優美な姿勢、スプールを見た時得も云はれぬ感じの出来る
のである。この年になつてどうやら一般スキー術のみでは
私のスキーへの憧れを満足する事が出来なくなつた。そし
て三角山、圓山に遊びに行つては小さいシャンツエの出来
てるのを見てどうしても一度それを飛んで見なければ気が
すまないと云ふ様になつた。一度轉べば立つまで頑張つて
しまふ。こうしてゐる中に二月下旬にある校内大會に出場の
野心を抱かせた。大會の行なはれる四、五日前に友一人と
こつそり出掛けた。それは私には今までかつてない程の一
大決断であつた。先づ札幌シャンツエの先端に立つてラン
ディング斜面を見下した時私の心身はある一つの寒さにお
そはれた。外に誰れも飛ばうとするものが一人もない。こ
の只一人と云ふ事が大きな恐怖を起すに充分だつたかも知
れないが、然し其の外に大きなものが残つて居た様に思は
れる。中段に登つて下を向いた時足は震へて居る。スター
トの姿勢を取つた。今までこのスタートの際には必ずジャ
ムブの全過程を完全の中でかみこなし、それから自信
を持つて滑べり出せと教へられて居た。其の時も私はやつ

た。だがそうする事は私を落着かすよりも却へつてそれと
反對な氣持ちを起さした様である。えーこゝなつたらなる
様にしかならない、やけのかんばち……ゲンとストックにス
ピードを得て滑り出した。何んな具合に延びあがり、どん
な具合に空中の姿勢を取つたかは知らない。兎に角白いも
のが近づいて來る事だけがはつきり分つた。次の瞬間には
もう滑べり出して居る。シヨックもなにもない。ランディ
ングの姿勢を取つたのか取らないのか分らないけれども立
つて滑べつて行つて下で止つた時の私の氣持ち。一年目の
春の合宿の折の時よりシャンツエが大きいだけあつてその
喜びは大きかつた。それに大きな力を得て第二本目と意氣
込んで上つて行く時、そのスプールを見た左足が前に居る
丁度申分ない程かるいテレマークの形を取つたらしい跡だ
つた。

二本目、もう一本目の様な寒さもなかつた。いくらかま
だ恐怖は去らなかつたけれども……元氣良く滑り出した。
今度は前の様な具合には行かない。いきなり前にツンノ
メつた。其所で今日の練習はやめた。それは五分にして
後の楽しさを、向上の意をくぢかない様にと思つたからで

ある。此所にもまた偶然が表はれて居やしなかつたか……それからも随分私のスキーへの憧れには偶然が伴つて居る。頭到校内大會がやつて来た。そしてかしこくも秩父宮殿下の臺覧をあふいだ。私はB組のジャムプに出場、その時A組（選手と今までにB組で入賞したもの）では卅米を飛んだ。

何故か其の日は皆成績悪るく二本とも立つたものはB組で僅かに二人、一本立つたものが三等に入賞する事が出来たのだから推して知るべしである。私は幸ひにも二本とも立つ事を得たが距離が短かつた爲に二等であつた。此の會で我々初めての四〇籽と云ふ長距離のデイスタンスレースが行なはれた。約十里である。それを四時間位で走るのだから實際驚かざるを得ない。だが外國では五〇籽もの距離をこの四時間足らずで走るのだから尙更目を丸くさせられる。

ジャムプに於ても相だ、此の年飯山で緒方温光君が卅五米を飛んで立つたと云ふ。これが日本の最長距離だつた然るに外國では六〇米も七〇米も平氣で飛び、そして轉ぶものは本當に數へる位だと聞く、身震ひする位だ。

第四年目がやつて来た。而して雪を待つもの、スキーに憧れるものには本當に幸福な年であつた。札幌では十二月一日から根雪になる。先年オリムピックの大會に送つた我が選手が歸へつて来て居る。おまけにノールウエーの神様の様な三人の選手が招聘される。私は冬の青山合宿から選まれて一意専心ジャムプにいそしむ事が出来た。有り難や伴選手のコーチである。そのもの凄い外國のサツツを教へられては本當にそんなのかなあと不思議を抱かざるを得なかつた。本當に教へられた通りである。初めて札幌シャンツェでノールウエー人の飛ぶ様を見て何んにも言葉が出なかつた。私は卅米邊の所により行けなかつた時、第一本目のジャムプがあつた。自分の頭の上に落ちて来るんぢやないかと縮みあがつて驚いてしまつた。その距離、空中の姿勢、ランディング、皆今迄で考へて居た事の二倍も、三倍もに増してうまさ、すごさがあつた。其のフライトの悠長さたるや實に鳥の様に感じられ、兩手は鳥の翼である。其の後何回となく彼處の飛躍を見物したが、彼等の飛ぶ姿を見る毎に感ずる事はサツツの力強い事とランディングの巧妙さであつたが、それよりもフライトの見物人をして

アツと驚かし、然も少しも危なげのない氣持ちを起させる事であつた。横から見ても縦から見ても微動だもしない。

それより見て我が日本人のジャムプは實に見物人をしてヒヤツとさせるあまりにみすほらしい姿である。それに加へてスピードが大きな原因をなして驚かすのであらう。フライトでは本當にシャツの袖がバタ／＼と音をたてるから、やつてるものはそうまで感じない。無我の境に入り總ての事を忘れてしまつてるから、そして只耳もとで風の音がかすかに聞へるだけである。

日本は今すべてのスキー術に於て—歐洲のそれを空中の一つの線と假定するなればそれへ—進行中である。その一つの階段はこの私のスキーへの第四年目（一九二九）であつた。

彼等のその線に追つつく事も、もう僅かだ。ジャムプに於ては正にその線に手ごとゞいて居る。赤城のシャンツエを見よ。そして今度札幌の三角山の近くに出来る大倉男爵の寄贈になるシャンツエを考へて見よ。世界のシャンツエの五〇米を標準とするその五〇米標準のシャンツエである。赤城の山では五一米のジャムプを見た。丸で燕の様な早さ

とその小さくなる人の姿は飛行機を想像せしめる。私は日本のスキーの早く世界のレベルに交りてその技の争はれん事の實現される事を望んで居る。そして又それ以上進んで夢の様ではあるがジャムプなるスキーの華、スキーの王者を飛行機化し度い。そうしたらあの殺戮なサツツ、ランディングをもつと優美に、なめらかに出来る、然も最も痛快味のあるフライトの時間を長く味ふ事が出来るだらうと考へられる。

誰れか飛行機發明者の様な人が現れて来て呉れないかなあ！私のスキーへの憧れの夢はこの飛行機化する事にある

（一九二九・八・二）

スキー競技會のコース

山 田 生

スキー競技會のコース選定とその發表方法に就いては今まで随分方々の人々によりコースの形及び發表方法改善の事を試みられた。そして仲々行きとゞいた様だが未だこれを各地合同競技の時に見るに頗る徹底せぬ所がある。

毎年行はれて居る全日本スキー大會の如きに例を取つて見るならば、開催地に集つた他地方の選手の口より、必ず或る不平を並べられるのでも分かる。或るものはコースの難易、平凡又はその發表の不公平を言ふのである。この事は言はれた選手の泣事ではない。當然の不平を發表したに過ぎぬ。年々の各地コースを見るに全く特異とも見られる地方色の勝つたものを以て他地方選手にあてがひ、少々の補修を加へ無理強いに納得させ、距離の増加にあつて只スタートやゴールの附近のみをかざつて無意味の長距離コースを作り、稀には(稀といつても、ちよいと)といつて

も同じ様だ)同方向に二回のコース上を走らせ徒に走者なかせている。(同じコースの二回廻りも或る異なつた部分を附加して、只二回使用したのならよい)そして、この都合をなじられたとき、委員が或る經費云々等を持ち出し平然たるものある如きは全くコース選定についての能力資格なきを裏書きするものである。だがこれも、此の場合善意に解しておこう。或は考へ様によりこの事は地方巡業式の所謂各地持廻り制による當然の歸決であらうといふ事に持廻り制によるときは、地方團體に依頼するの結果權威ある理論家の各地方平等配分を欠き、コース選定も編したものにたり、或は地方町政の如き下らぬものに支配されコース選定の自由を失ふ等の諸弊を生ずるものである。従つてその發表の如きも自然に即ち陰に陽に、又は丑形になつてこんながらがり變な發表をする事が多いのだ。

今の吾がスキー競技會には是非共もレースコースの性質を完全に具へた、然も全走者に公平に條件のあてはまるものを作る事だ。即ち發表の結果、地理的負擔の同程度なものでなければならぬ(スタート順と天候の影響やその他これに類した事はこの場合第二段のものだ)即ち發表の公平

と發表内容物の公平である。

發表の公平を期し得るものは完全なる定期日發表である但しこの際あまり前の發表はよろしくない、前日又は當日がよく、この事は頗るよくまとまつた制度より發せられるので、前にも言つた様な地方の無能力者を集めたものからは先づ絶體發表せられぬ。殊に今まで所謂週日に協議されたものにこの弊が多いから笑止だ。スキー倶樂部の名譽とか、町の名譽とかばかり考へて引き受けてるせいもあらうが頗る走る方にしては迷惑な話だ。然し一方もし立派な邦人が二人乃至三人居て（其の地方に）うまく仕事をほこんだとしても、必ず地方色といふ奴が現はれて来るから結果はうまく行き相に見へて居て、走つて見ると結局少々ぬけた所あつた事を裏書きされる。亦一個の權威（全く理想的の能力に見識ある）に任しきりにして、發表まで待つて居れる状態にもないし、そんな人もをるまい。

以上の發表方法を嚴正に決定して何等の支障を來さぬ、否その事を意義あらうしめる事は、發表内容物の公平といふ事で、内容の公平は絶體に在來の方法では期する事を得ない。

内容の公平は競技會開催の地を一ヶ所に個定せしめる事

より確保される。即ち一ヶ所に個定する事により各地方の人間は毎年同じ所に集まり練習する事になり、又その結果完全なる制度も生れるもので、各地より選出された委員の小數と、同一ヶ所開催によるコースの選定は各自の選手によりすでに充分知られた、地形上にコースを定めるのに、すでに各人により知られてる或數字の點と點との適宜結び付けにより發表とその内容を確實に公平にするを得るものである。年々これによるときは、只點の結び付けは發表の如何により不明なだけで地理全体としては各地方選手にすでに熟知されて居るのである。こうなると従來のコース指示にあたつて全く成つて居なかつた程度の標識でも間に合ふ事になる。この事で全くコース發表の凡べての完全なものを生ずる事が出来るのだ。只開催地外の選手方は多少費用の餘計にかゝる事となるが、然し決してこの事なくては公平發表の如き、確保されぬとならば亦問題でない。

而して西北の兩端のスキー團の妥協問題はあへて心配する程のものではない。妥協の餘地がなければ無くてもよいこの事は何れ又時季が來たら考へて見様と思ふ。（終り）

文にまとまりが無いのは讀者諸兄に氣の毒した様なものだが重々おゆるしを願ひます。



お 断 り

○原稿不揃の爲遅れて相すみません、悪からず御容赦の程を

○山とスキーの會退會者 高 松 正 樹 君

山とスキー

第八年 總目錄

自一九二八年八月 第八十四號
至一九二九年八月 第九十四號

札幌 山とスキーの會 發行

山とスキー第八年目次

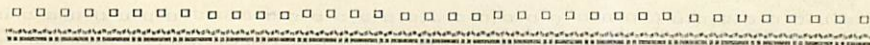
(自一九二八年八月第百八十四號
至一九二九年八月第百九十四號)

論 說

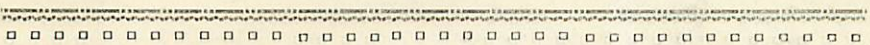
| | |
|---------------------------|----------------|
| オリンピアードのスキー競技を観る…………… | 廣田戸七郎……………(一) |
| ロッゲケビン及びカツテーヂ…………… | 伊藤虎夫譯……………(二三) |
| 其の建築法・造作・飾付及び家具の造方…………… | 伊藤秀五郎……………(二三) |
| 登山の本質に關する一考察…………… | 中村新一郎……………(二六) |
| スキー材とワツクスと雪質温度に就いて…………… | 伊藤虎夫譯……………(二七) |
| ロッゲケビン及びカツテーヂ…………… | 齋藤省三……………(二九) |
| 其の建築法・造作・飾付及び家具の造方…………… | 加納一郎……………(三七) |
| スキーワツクスの製作に關して…………… | 中村新一郎……………(三三) |
| シュネークンデに於ける二三の誤謬について…………… | 宇都宮高譯……………(三五) |
| デイスタンスレスのコースに就て…………… | 奥井由雄譯……………(三五) |
| スキー運動の生理的特徴及び衛生的注意…………… | |
| 雪崩に就て…………… | |
| 入浴及マツサージに就いて…………… | |

登山研究・紀行・文苑

憶ひ出深かりしヒュッテンレーベン……(ノールウエーの記)二……………廣田戸七郎……………(二二)

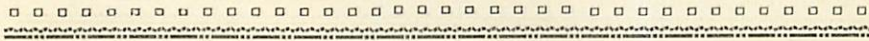


| | | | | |
|------------------|--------------------|-------|------------|-----------|
| 丘への生活 | | 館脇 | 操 |(三五) |
| トナシベツ川 | | 伊藤秀五郎 |(九) | |
| 山に就いての感想 | | 伊藤秀五郎 |(九) | |
| 憶ひ出深かりしヒユツテンレーベン |(ノールウエーの記)三 | 廣田戸七郎 |(二〇六) | |
| 登山家の横顔 | | 伊藤秀五郎 |(二八四) | |
| 憶ひ出深かりしヒユツテンレーベン |(ホルメンコーレンデー)五 | 廣田戸七郎 |(二九八) | |
| 登山とスポーツ | | 伊藤秀五郎 |(三〇八) | |
| 冬の然別沼 | | 伊藤秀五郎 |(三三七) | |
| デイー・バイデン | | 伊藤秀五郎 |(三四三) | |
| 「対象としての山岳」一・二 |(丘への生活に答へて) | 井田清 |(三四六) | |
| 三ノ瀬村 | | |(三五七) | |
| 積丹半島の春 | | 山口健兒 |(二八六) | |
| 春の唐松岳 | | 小池文雄 |(二九四) | |
| 草薙の葉 | | 山口生 |(三〇一) | |
| 北海道の春 | | 伊藤秀五郎 |(三〇四) | |
| 中山スキー小屋 | | 井出生 |(三〇〇) | |
| 対象としての山岳 |(三二) | 井田清 |(三三〇) | |
| 大雪からトムラウシへ | | 武野穀次郎 |(三七四) | |



其の他

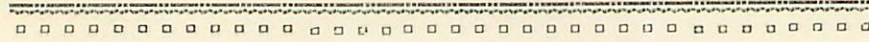
- スキーオリムピック大倉行……(五〇軒競技に出席して)……………高橋 昂……(七)
- 「山の呼ぶ聲」を讀んで……………加納 生……(六)
- 日章旗アムステルダムに翻る……………廣田 生……(六)
- 謹 述……………小川 生……(九)
- 灰色の恐怖……………ハンス・モルゲンターレル……(二)
- 老登山者の回想……………ギトオ・オイゲン・ランメル……(二)
- 「聖山」批評……………加納 一郎……(四)
- 秩父宮殿下ヒュツテの竣工に當つて……………小川 玄一 謹記……(一七)
- 記憶の中より……………宇都宮 高……(三)
- 第七回全日本スキー選手権大會の感想……………廣田 戸七 郎……(三)
- 第二回學生スキー競技大會を終つて……………高橋 昂……(三)
- 赤城シャンツエの全日本ジャムピング競技會を観る……………廣田 戸七 郎……(五)
- 一九二八年度を省みて……………中村 新一 郎……(三)
- 「競走路の可及的前日發表」に就て……………宮 下 利 三……(三)
- 日高山脈の地名に就いて……特に戸島川上流地方の山岳名……………伊藤 秀五 郎……(三)
- 夏スキーのサイズに就て……………(三七)



| | | | | | |
|------------------|-------|-------|-------|-------|------|
| 筆のまゝ | | M | 生 | | (三六) |
| 其の頃 | | 廣 | 田 | | (三三) |
| 熊の話 | | | | | (三五) |
| 第十七シーズン略報 | | | | | (三六) |
| 「屋上登攀者」その他 | | 加 | 納 | | (三五) |
| 其の頃 | | 廣 | 田 | | (三九) |
| 路面スケッチ及地圖の作り方 | | 森 | 田 | | (三六) |
| 豫備練習の身体に及ぼす影響 | | 中 | 村 | | (三七) |
| スキーへの憧れ | | う | る | | (三九) |
| スキー競技會とそのコースに就いて | | 山 | 田 | | (三八) |

寫 眞 版

| | |
|---------------------|-------|
| ルドルフ・ブルケルト | |
| 冬の日曜日のシエヌングス・ヒユツテ | |
| ヤンソン(五〇籽二着) | |
| 槍 岳 | |
| クロステルのセルフランガア・シヤンツエ | |
| シエヌングス・ヒユツテの丘にて | |



| | |
|----------------------------|------|
| 忠別岳の頂上よりトムラウシ山を望む..... | 渡邊千尙 |
| ミリタリー・スキーレース..... | |
| ジグモンド・ルードとホルメンコールバツケン..... | |
| ノールウエー一流選手の飛躍振り..... | |
| 赤城山の第五シャンツェ..... | |
| 空沼岳御滑降中の高松宮殿下..... | |
| 空沼小屋..... | |
| ノールウエー三選手の勞を謝す..... | |
| スキー小屋の窓より..... | |
| 五月の群別岳..... | 渡邊千尙 |
| 中山峠より札幌岳・狭薄岳・漁岳を見る..... | 岡田次郎 |
| 十勝..... | |
| 石狩岳の頂上..... | |
| ヘルベチユア・ヒユツテへ..... | |
| マツターホルン..... | |
| カールセン君の飛躍..... | |
| オベレンガーディン..... | |

則家五〇〇勝

岡村源太郎遺稿集

スキーデイスタンスレース

完 成
限定五〇〇部

体 裁 菊判 三三〇頁 假製綴

紙 質 上質紙 寫真版六葉

實 價 金 貳圓

發 兌 札 幌 山とスキーの會

小樽 梅屋運動具店

御申込は甚だ勝手ですが成るべく小樽稻穂町梅屋運動具店宛にお願い申します。

山とスキーの會



SKI HEIL

スキ一
ト

其用與全般

中野商店

スキ一印ハバ

第一
斯最
大量
數產

并L 帆



GET SUPERFINE SKEES.
AND MAKE AN
EXCELLENT
RECORD!

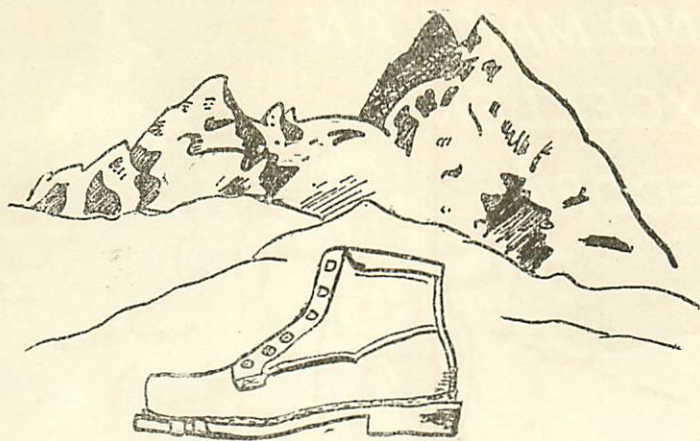


優秀ナスキー用其具

小樽

梅屋運動具店

北海帝國大學キス一部及同岳部御用



登山靴とキス靴

各種

札幌市南一条十字街

木本靴店

1951年11月1日 國立中央圖書館



登山鞋

谷 冊

1951年11月1日 國立中央圖書館

木 本 鞋 冊

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に興味を持たれる方が一人でも多くお読み下さることを願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されることをお願いします、又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下けること。

◆記事中の數量は全て、O・G・S・系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

◆本會より發する電信略號を「ヤマ」として居ります。

◆前金切れの時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまでは配本を見合せます。

定 價 金參拾錢

*前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

*御送金はなるべく振替にてお願致します。

*六冊分前金拂込の方には送料を頂けません

*前金の切れた時の御知らせは最後の分の包装中に同封して御送りします。次の御送金あるまで配本を見合せます。

*本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、縁故の有無にかゝらず雜誌の代價は頂きます。

昭和四年八月十五日印刷

昭和四年八月十五日發行

(毎月一回一日發行)

編輯者 小 川 玄 一

印刷兼 發行者 小 川 玄 一

北海道札幌市北一條西二丁目

印刷所 札幌印刷株式會社

北海道札幌市北二條西十五丁目

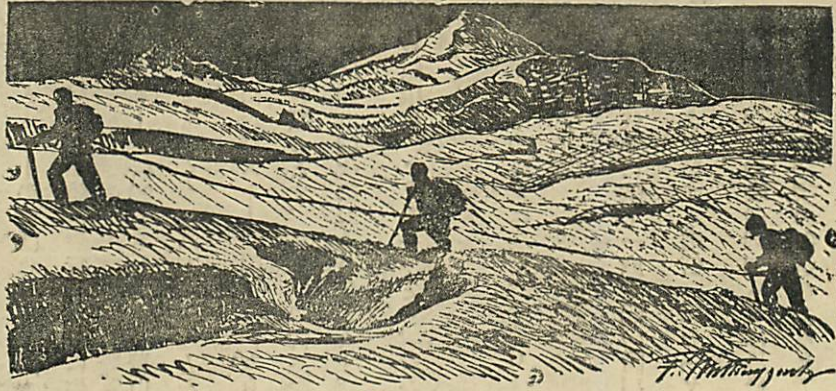
發行所 山とスキーの會

振替水簿八四九五番

La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Clubo

No. 94. agosto 1929. Sapporo. Japanujo.

大正十三年七月二十七日第三種郵便物認可
昭和四年八月十五日印刷納本
昭和四年八月十五日發行



夏山・冬山の道具!

東京工業試験所・山岳會各山岳部檢定

糸赤入 ベルグ・サイル
「メタ」燃料及びコツヘル
テントとリュツクザツク

美滿津特製山スキー

新案 携帶ストーブ (煙筒付)

META 燃料株式會社 日本代理店
WINSLOW スケート製造會社 極東代理店

合名會社

美滿津商店

東京・本郷・赤門前

山とスキー

第九十四號(倍大號)

定價金六拾錢